

昆布山谷・出土谷の景観と変遷

—発掘調査・石造物調査成果を中心として—

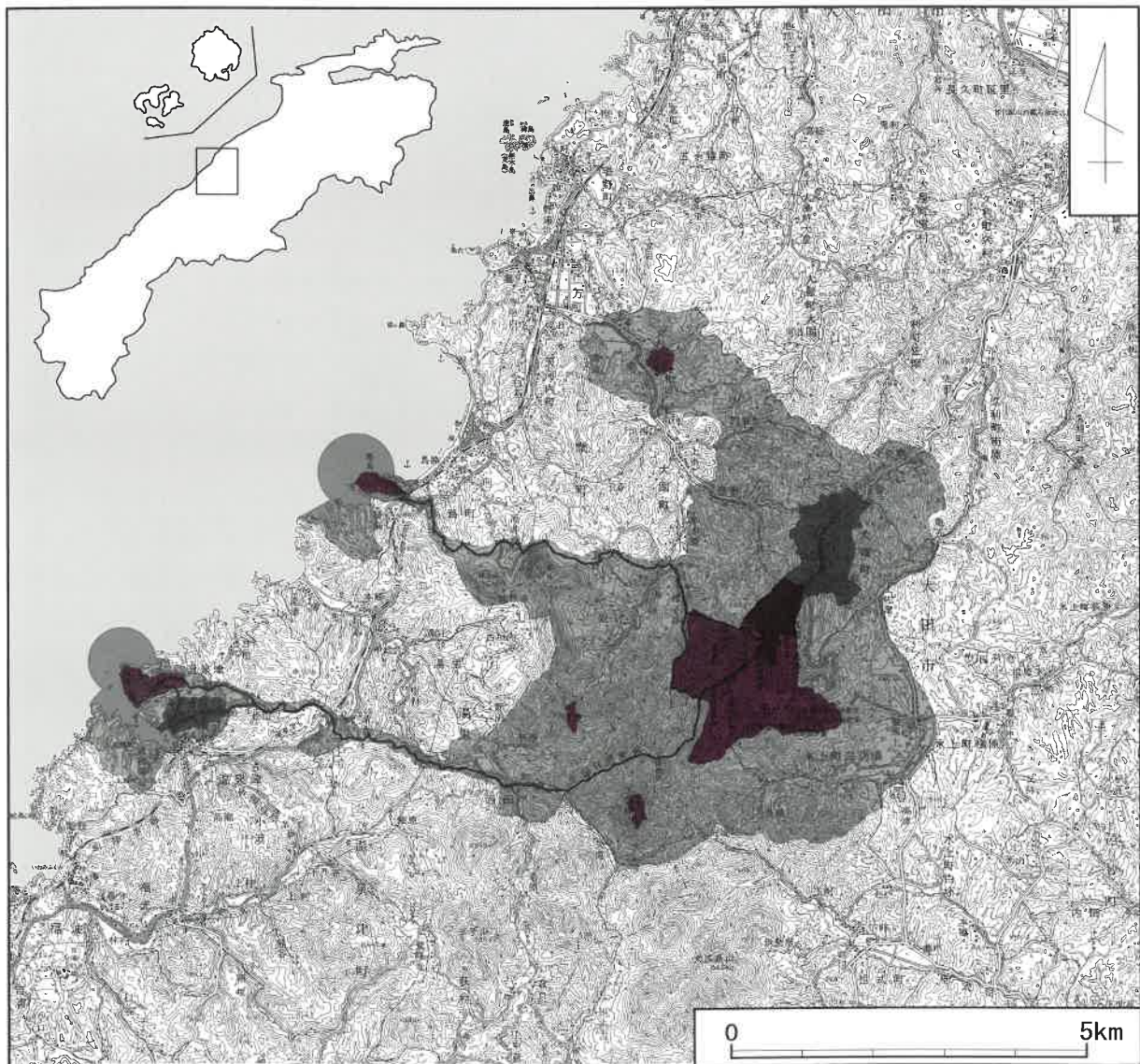
西尾克己・新川 隆・尾村 勝・今岡一三

1. はじめに

第1章で述べているとおり、平成8年度から島根県と大田市では発掘調査や石造物調査、文献調査などの基礎調査研究を継続的に進めている。その成果として、文献史料や絵図をもとに文献史学や地理学等に於いて推察されていた石見銀山の景観や鉱山集落の形態変遷について

も、発掘調査の成果によって徐々に明らかになりつつある。

今回のテーマである「鉱山町の変遷」は、石見銀山を形成する大森町、銀山町の変遷と画期を明らかにすることを目的として取り組んできた。しかしながら、発掘調査や石造物調査の多くは銀山町を中心として行われているという制約もあった。ただし、その結果として銀山町は



第1図 石見銀山遺跡位置図

石見銀山の開発から最盛期、衰退の歴史を知る上で重要な地域であることがわかったのである。

本稿では、仙ノ山西麓に位置する昆布山谷と出土谷の発掘調査や石造物調査の成果を中心に、銀山町の集落景観の変遷を考えることにしたい。

2. 既往の調査

1. 分布調査

昆布山谷地区谷筋の東西両平坦面の大まかな最終使用時期と土地利用の変遷を追うことを目的に、平成24年（2012）から翌25年（2013）にかけて分布調査を行った。

調査にあたって石見銀山遺跡の調査グリッドを使用し、南北600mの谷筋の平坦面と、その周辺を含めた範囲に10mメッシュを設定し、そのグリッドごとに遺物採集を行った。また主な平坦面には、「東○」といった平坦面番号も記入した（墓地跡は除く）。両平坦面の特徴を以下に記す。

東平坦面

東22のように、数か所規模の広い平坦面が存在している。これは明治期の藤田組の施設跡の場所である。現地は坑道から排出されたズリによる盛土造成が顕著である。また明治10～20年代の切図には山林や耕宅地扱いとなっており、使用されなくなっていた土地を藤田組が借用あるいは買収し、広く造成したと思われる。付近には、坑道から鉱石を搬出する巻き上げ機と思われるコンクリート構造物も存在する。

採集遺物は、19世紀代のものがほとんどで特に東14などの藤田組の施設建設地と思われる平坦面には「藤田組大森鑛山所」の銘が付いた陶器類など関係する遺物も採集できた。

その他、坑口の数が西側に比べ5倍も多く、「新横相」や「村上山」といった主要な坑口も東側に存在する。また、18世紀初期の「間歩改帳」には、この谷に所在する「斎賀山」「正道院山」の名の稼働間歩が記載されている。場所は特定できていないが現在でも同一の字名があ

り、ともに東側に位置する。

西平坦面

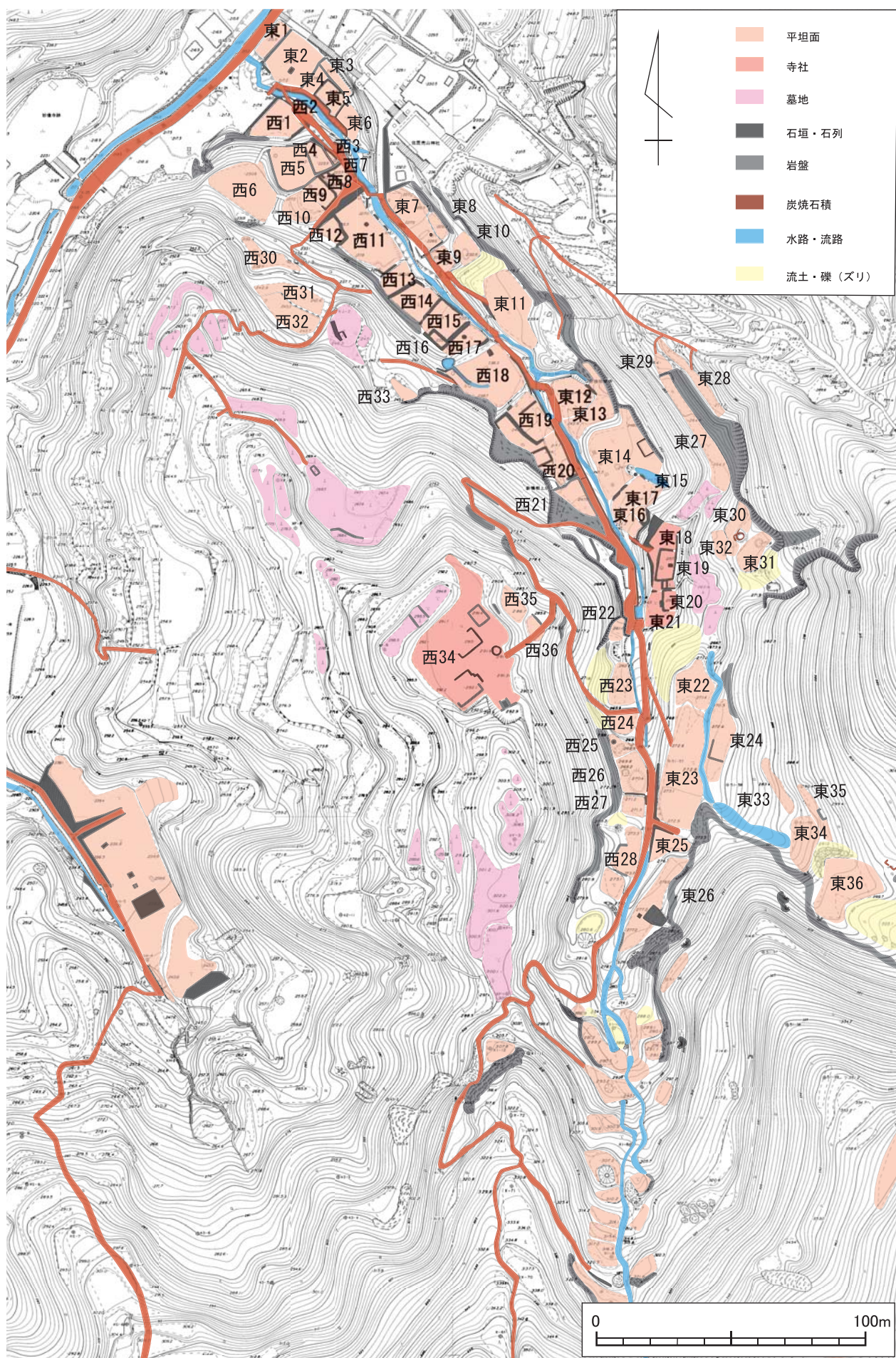
尾根上に長楽寺跡や妙本寺墓地群などがあり、また「サンマイ原」「寺ノ下モ」「サイカ」といった宗教的な字名もある。

現地には、基壇や墓石または参道跡・岩窟などがいたるところにみえる。また、岩盤加工遺構も多くみられる。平坦面の区割りは石垣で精緻に分けられおり、1つの区割り範囲も狭い。18世紀初頭の史料には、谷筋脇の平坦面以外の尾根上や斜面の平坦面は「西向寺分」や「長福寺分」「荒神分」と記載されており、寺の力が大きかったことが読み取れる。「荒神分」と記載されている場所は、小高い場所にある。そこには石段が設けられており、広さ二間四方の平坦面に石塔と半間四方の方形の岩窟の祠が見える。

採集遺物は、東側に比べ主体が18世紀代と古くなる。岩盤が谷筋にせまっており、水害による尾根上からの流入土が激しくみられたため、尾根上の平坦面からの遺物流入も考えられる。そのせいか、寺関連の遺物も多く、仏飯器・花生・香炉なども採集された。

中には、「嘉永四 亥七月吉□ 石州福光本領 白谷勘場 施主 鶴太郎」の刻字が高台内に入った石見焼の花生を採集した。嘉永4年（1851）の7月に、この花生を石見国福光本領の鶴太郎という人物が寄進した記述である。花生は2つに割れており、一片は尾根上の長楽寺跡に、もう一片は谷底の流土上にあり、前述の尾根からの流入を物語っている。また、福光所在の人物が当地の寺に寄進していることから天領という広い地域で銀山を考えなければならない一端でもある。長楽寺跡からは、他に陶製狛犬の脚部も採集した。

このように、18世紀以降の遺物がほとんどを占めることや水害などによる流土の堆積状況などから、18世紀代に現状に近い大規模な区画整備が行われたものと思われる。その後、数度の水害にみまわれ、小規模な区画変更は行われたものの、明治初期までは比較的当時の状況をと



第2図 昆布山谷地区平坦面配置図 (S = 1 : 2,000)

どめていた可能性が高い。藤田組の入山後は、石垣で段差のついた狭い区画を買収し、坑口からのズリを利用し盛土をおこない、広い平坦面に変化していったと思われる。以上のような谷の姿が、現地踏査と表面採集の遺物によって浮かび上がる。

ただ、地番や字名が複雑に推移しているの
で、このとおりではない。 (尾村)

II. 発掘調査

^{だしつちたに}
出土谷地区の発掘調査については、平成9 (1997) 年度から平成15 (2003) 年度まで、昆布山谷地区の発掘調査については平成22 (2010) 年度から平成29 (2017) 年度まで、年次ごとに実施されており、各年度の調査成果については第1表のとおりである。両谷は、江戸期には一体的に捉えられており、出土谷も昆布山谷に含めて扱われていた。

出土谷地区

出土谷は仙ノ山北西麓に位置し、南東から北西方向に延びる谷で、北西側で栃畑谷と合流する。発掘調査は、平成9 (1997) 年度から平成15 (2003) 年度まで実施され、Ⅰ区～Ⅲ区の調査区が設定されている。

Ⅰ区では、1 Tと2 Tが設けられている。1 Tは、No.247間歩の前面平坦面に設定されたトレンチで、土間面、製錬炉 (SX01)、不明遺構 (SX02) などが検出され、製錬施設を持つ建物の一部と推定されている。2 Tは、1 Tと道を隔てて向かい合う平坦地に「コ」字形に設定されたトレンチで、土間面と製錬炉 (SX05) 及び製錬関連遺構 (SX03) などが検出されている。

Ⅱ区はⅠ区の南東側の平坦面に設けられた調査区で、当初はトレンチ調査であったが、遺構が検出されたため、拡張を繰り返して調査された結果、礎石建物、製錬遺構など多くの遺構が検出され、18世紀後半を中心とした製錬施設であることが確認された。また、No.247間歩前まで拡張した結果、No.247と同一遺構面であることが確認され、同時期に機能していたことも判

明した。さらに、下層確認トレンチでは、石垣及び石垣によって形成された平坦面が検出され、当該地の開発時期が遅くとも17世紀初頭まで遡ることも確認された。

Ⅲ区はⅡ区の南東の平坦地に設けられた調査区で、水路を確認する目的で小規模なトレンチが6箇所を設定された。調査の結果、2時期の分岐した水路と明治期の建物跡が確認された。

昆布山谷地区

昆布山谷は出土谷の南側を出土谷と平行して延びる谷で、北西側で栃畑谷と合流する。発掘調査は、平成22 (2010) 年度から平成29 (2017) 年度まで実施され、谷の上流から下流まで谷全体をカバーするように8地点 (第1地点～第8地点) において調査地が設定されている。

第1地点は、^{さひめやま}佐毘売山神社のすぐ南側で、No.229前の平坦地に設けられた調査区である。1 T、2 T、8 Tの各トレンチが設定され、調査が実施されており、調査の結果、建物の礎石や石列及び19世紀代と推定される製錬炉が検出されている。

第2地点は、第1地点の南東約60mの位置で、谷の中では下流側に相当する平坦地に設定された調査区である。礎石建物、炉跡、溝跡、土坑、石組遺構等が検出されており、北側の礎石建物は明治期の選鉱場跡と推定され、南側の建物は江戸時代後期の製錬炉を持つ建物跡と推定されている。

第3地点は、谷の奥で谷幅が急激に狭くなっている位置に当たり、谷の東側の平坦面に設定された調査区である。幅約2mのトレンチ調査で、礎石建物跡、被熱した石組遺構、岩盤加工遺構等が検出された。カマドを持つ建物跡は19世紀代と考えられ、岩盤加工遺構は江戸時代初期と推定されている。

第4地点は、谷の中央付近で村上坑の道を隔てた向かい側の平坦地に設定された調査区である。礎石建物跡、土坑、石垣、溝跡、道路遺構、木製木組遺構等が検出されており、下層確認トレンチでは石垣や岩盤加工遺構等が検出されている。礎石建物は通り土間にカマドを有す

第1表 出土谷・昆布山谷調査成果一覧

調査年度	調査地区	調査地	調 査 成 果	文 献
平成 9 年	出土谷	I 区 1 T	製錬施設を持つ建物の一部を検出した。 遺構は S X 01、02、土間面などを検出した。	概要10 報告Ⅱ
平成10年	出土谷	I 区 2 T	2 Tでは、土間面及び製錬炉などを検出した。	概要10 報告Ⅱ
		Ⅱ区 3 T	3 Tでは、礎石建物の一部を検出した。	
平成11年	出土谷	Ⅱ 区	3 Tを拡張し、礎石建物を確認した。建物に伴う製錬施設を 3 基検出した。遺物から、建物跡は18世紀後半頃の製錬施設と推定した。また、下層確認により、開発時期が遅くとも17世紀初頭まで遡ることを確認した。	概要10 報告Ⅱ
平成12年	出土谷	Ⅱ 区	調査区を拡張し、ズリ廃棄場のズリ山撤去及び剥ぎ取りを実施。ズリ最下層で灰吹銀が出土した。	概要13 報告Ⅱ
平成13年	出土谷	Ⅱ 区	調査区をNo.247間歩前まで拡張し、建物と間歩が同時期に機能していたことを確認。道及び水路が数回にわたって造り直されていたことも判明した。	概要13 報告Ⅱ
平成14年	出土谷	Ⅱ 区	平坦面及び道、水路の精査を行い、水路の構築は 2 時期であると確認し、新しい時期は明治期であると判明した。	概要13 報告Ⅱ
平成15年	出土谷	Ⅲ 区	Ⅱ 区の南東にⅢ区を設定、水路を中心にトレンチ調査を行い、明治期の建物跡の一部を確認した。「鑛山所」と記された湯のみも出土した。	報告Ⅱ
平成22年	昆布山谷	第 1 地点	第 1 地点では、礎石建物の一部及び炉跡を検出した。	概要20
		第 2 地点	第 2 地点では、近代の大型礎石建物の一部を検出した。	
平成23年	昆布山谷	第 1 地点	第 1 地点では、前年度検出の礎石建物の一部の可能性がある礎石を検出した。	概要21
		第 2 地点	第 2 地点では、調査区を拡張して調査を行い、近代の礎石建物は藤田組の選鉱所である可能性が高まった。また、江戸時代後期の礎石建物と炉跡も確認した。	
平成24年	昆布山谷	第 3 地点	第 3 地点では、19世紀以降の礎石建物及び、江戸時代初期の岩盤加工遺構を検出した。	概要22
		第 4 地点	第 4 地点では、敷地境界となる石垣と土間面を検出し、木製木組遺構も検出した。	
平成25年	昆布山谷	第 4 地点	調査区を拡張して精査し、礎石建物及び、南北と東で敷地堺の石垣を検出した。建物南端でカマドを確認し、通り土間と台所を持つ建物跡と判明。木製木組遺構はころばし根太遺構と推定した。	概要22
平成26年	昆布山谷	第 5 地点	18世紀末～19世紀代の礎石建物を検出した。建物の内 1 棟は大型で南と西には側溝が巡っており、土間では小型の炉跡も検出した。調査区西端では岩盤加工遺構を、調査区南側では、藤田組の鍛冶場の礎石建物を検出し、内部では鍛冶炉を 2 基検出した。	概要23
平成27年	昆布山谷	第 5 地点	第 5 地点では、調査区西端を掘り下げ、岩盤加工を検出した。また、小範囲ではあるが、複数面の遺構面を確認し、製錬関連遺構(炉跡)も検出した。	概要24
		第 6 地点	第 6・第 7 地点では、岩盤加工遺構の顕在化を行い、顕在化した遺構の測量を行った。	
		第 7 地点		
平成28年	昆布山谷	第 5 地点	第 5 地点では、Ⅰ 区の調査区を拡張して下層の調査を行い、硬化面上に18世紀代のユリカス廃棄場を検出した。	概要25
		第 6 地点	第 6 地点では、道跡推定地の表土除去を行い、岩盤に掘り込まれた道跡を検出し、長楽寺参道と推定した。	
		第 8 地点	第 8 地点では、現道路部分の調査を行い、敷地区画の石垣及び、18世紀代後半の道跡を検出した。	
平成29年	昆布山谷	第 5 地点	前年度の調査区をさらに拡張し、下層確認を行った。残存状況の良好な炉跡、石組み水溜遺構などを検出し、17世紀後半の遺構と推定した。一部深掘りを実施し、江戸時代初期の岩盤加工遺構を検出した。また、敷地区画の石垣及び18世紀後半の道路遺構も検出した。	概要26

るもので、床下構造と考えられる木製木組遺構も検出されており、19世紀代の建物と推定されている。岩盤加工遺構は江戸時代初期と考えられ、下層の石垣、遺構面等は17世紀代と推定されている。

第5地点は、第2地点のすぐ南側の平坦面に設定された調査区である。5面以上の遺構面が確認されており、礎石建物跡、溝跡、炉跡、水溜遺構、岩盤加工遺構等の他、ユリカス集積遺構、ズリ堆積層等も確認されている。岩盤加工遺構は江戸時代初期と推定され、炉跡、水溜遺構は17世紀後半、ユリカス堆積層は18世紀前半と考えられている。その後、石垣を築いて敷地を2段に造成し、各段に18世紀末から19世紀代の礎石建物を建築している。調査区南側では、明治期の藤田組の鍛冶場と推定される礎石建物が検出され、内部で2基の鍛冶炉が確認されている。また、東側の調査区では、敷地境界と推定される石垣及び道路面が検出され、17世紀代と18世紀後半の2時期の構築と推定されている。

第6地点は、第5地点から約40m南東の位置の調査区で、谷が狭まって岩盤が露出している。岩盤には、加工痕が確認されたため、加工痕の顕在化及びトレンチ調査が実施された。調査の結果、岩盤に彫り込まれた階段と、その階段を含む道跡などが検出され、長楽寺の参道と推定されている。

第7地点は、第6地点の南側に隣接する調査区で、発掘調査は実施せず、岩盤の顕在化のみが行われた。その結果、岩盤に彫り込まれた溝跡、階段状遺構が確認された。また、高さ1.7m、幅1.7m、奥行き3m程の岩窟も確認された。

第8地点は、第5地点と第6地点の中間に位置する調査区で、道路部分を中心にトレンチ調査が実施された。調査の結果、敷地の境界となる石垣及び道路面などが検出され、18世紀後半の道路遺構と推定されている。石垣には階段が設けられており、石垣上面の平坦面では礎石も確認されている。

(新川)

Ⅲ. 石造物調査

石見銀山遺跡の歴史的過程を石造物という観察対象を通して明らかにし、鉱山遺跡としての特性を把握することを目的として平成11年度から実施している。

分布調査や発掘調査では、近世前半から明治期に至るまでの遺構、遺物が確認されていることから、16世紀から明治時代にかけて鉱業活動や集落形成がなされたと考えられ、石見銀山の開発初期から隆盛・衰退、近代の再開までの歴史を知る上で重要な地区といえる。これまで長楽寺墓地と虎岸寺墓地、妙本寺上墓地の石造物調査が行われており、多種多様の石造物とその基数が把握されている。

各墓地の概要と調査状況は以下のとおりであるが、昆布山谷の北側で合流する栃畑谷に所在する字甚光院の石造物調査も実施していることから、その成果についても記すことにした。

昆布山谷地区の墓地

長楽寺墓地

長楽寺は真言宗の寺院で、明治12年の「寺院明細帳（大田市所蔵）」によれば、もとは仙ノ山に造立され、その後、年代不詳であるが、昆布山谷に移転し、明治10（1877）年9月に神宮寺に合併されたと記載されている。境内地は昆布山谷の西側の尾根上にある標高292mの平坦面にあり、寺院建物の基壇が残存している。また、境内地の北西から南西には土塁状の高まりが設けられている。

境内地の北西側にある土塁状の高まりと、境内地の南側に延びる尾根上及びその西側丘陵斜面に墓地が形成されている。調査の結果、212基の石造物が確認され、紀年銘から16世紀末から18世紀中葉までの造営が判明している。境内地北西側には歴代住職の墓があることから、長楽寺に直接関連する墓地の可能性が高いが、一方、南側の尾根上や西側斜面には、真言宗、浄土真宗、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗といった複数宗派の墓石が存在しており、共同墓地として営まれたものと推測される。

虎岸寺墓地

寺の由緒は不詳であるが、「上野家文書」や

「上知令に関する絵図」では禅宗寺院として記載されている。「要書録」の記述や「虎岸寺」という字名から大森町ニ274とその周辺に境内地があったと考えられている。

標高257～263mに位置する平坦面から斜面にかけて墓地が形成されており、約70基の石造物が確認できた。墓標を主体とする墓地の様相を呈しているが、享保5（1720）年の紀年銘のある一石五輪塔が最も古く、この時期に造墓が開始されたことが窺える。造墓数は18世紀前半から19世紀初頭にかけて増加傾向を示し、19世紀中頃には減少傾向になる。石造物には浄土宗や浄土真宗の墓が多数認められ、共同墓地的な様相が窺える。

地役人の丸茂久右衛門ほか8人によって建てられた組合せ宝篋印塔も確認されており、この宝篋印塔は石見銀山で近世前期に一般的に見られるものとは大きく形態の異なるものであった。これは特定個人の墓ではなく、総供養塔として造立されたものと推測され、地役人と地域社会、寺院との関わりを考える上で注目される。

妙本寺上墓地

妙本寺は日蓮宗の寺院で、「寺院明細帳」によれば、元龜（1570～1573）年間に、日基上人により創立されたが、天明2（1782）年の火災で記録類が焼失したため詳細は不詳という。

昆布山谷と栃畑谷が合流するすぐ上の丘陵に位置し、昆布山谷地区の墓地の中では最も広く、石造物の多い墓地でもある。墓石は丘陵上に万遍なく分布するのではなく、尾根上や斜面中腹に形成された平坦面に多く存在している。ある程度まとまりの見られる部分をA～Hの8地点に分けて調査を行い、総数500基以上の石造物が確認された。各地点で造墓開始時期は異なり、天正13（1585）年の紀年銘が記された一石五輪塔1基を確認したA地点が最も古いことが判明している。次いでB、C地点の天正18（1590）年、E地点の慶長4（1599）年となる。他の地点も17世紀前半頃からは造墓が始まっているようである。

妙本寺上墓地全体の造墓状況を見ると1600年代から1610年代にピークがあるものの、1620年代以降、減少傾向となる。1650年代から1720年代の約70年間には、紀年銘があまり確認されていない。このことは銀山地区における調査でも17世紀後半頃の墓石が少ないことと一致している。1730年代以降は徐々に増加の傾向をたどり、19世紀前半に第2のピークを迎えている。これも銀山全体では18世紀前半に宝篋印塔や五輪塔に代わって墓標類が採用され、19世紀初頭にかけて増加することと同様の傾向を示している。上記のことは17世紀初めの銀山の繁栄と衰退、再開発に伴う人口変動を反映しているもの

第2表 昆布山谷地区石造物一覧

調査 年度	地区名	寺院名・墓群	石造物の年代		一 宝	一 五	組 宝	組 五	無 縫	位 牌 形	尖 頂 方 形	笠 付 方 形	平 頂 方 形	尖 頂 方 柱	笠 付 方 柱	平 頂 方 柱	尖 頂 六 角	突 頂 方 柱	光 背 形	形 態 不 明	特 殊 形	石 仏	実測数	報告書
			上 限	下 限																				
H14	昆布山谷	長楽寺跡	文禄3(1594)	慶応元(1865)	39	9	11	4	19	2	29			27	1						1	7	149	参考(5)
H25	栃畑谷	字葛光院 (尾根上及び斜面)	文禄3(1594)	寛文3(1663)	42	20	16												3			2	83	参考(6)
H26	栃畑谷	字葛光院 (南東側斜面)	文禄4(1595)	正保3(1646)	56	21	27	1	4										1				110	参考(7)
H26	栃畑谷	字葛光院 (南側平坦面)	寛文3(1663)	昭和33(1958)	27	17	8	2	8		73	1		69		2			1			23	231	参考(7)
H27	昆布山谷	虎岸寺	享保5(1720)	明治45(1912)		1	1			1	27			28				1				14	73	参考(8)
H27	昆布山谷	妙本寺上 E地点	慶長4(1599)	明和8(1771)	42	12	35		2	3	5			1					2			2	104	参考(8)
H27	昆布山谷	妙本寺上 G地点	慶長元号	明治19(1886)	5	11	4	1	11	7	31	35	1		1	1	3			4		17	132	参考(8)
H28	昆布山谷	妙本寺上 A地点	天正13(1585)	延宝3(1675)	23	15	11	1	9										2				61	参考(9)
H29	昆布山谷	妙本寺上 B地点	天正18(1590)	元和2(1616)	1	11	1		1														14	参考(10)
H29	昆布山谷	妙本寺上 C地点	天正18(1590)	慶応2(1866)	20	15	18		2	1				109			1					3	169	参考(10)
H29	昆布山谷	妙本寺上 F地点	慶長12(1607)	文久3(1863)	16	3	4						1	40								4	169	参考(10)
H29	昆布山谷	妙本寺上 H地点	享保15(1730)	天保13(1842)		2	1		1					40				3				7	54	参考(10)

と推測される。

宗派を見ると、最初は浄土宗寺院の墓地として造営が開始されているが、日蓮宗、浄土真宗の墓が加わり、最終的には他の墓地同様に共同墓地的に営まれているようである。

栃畑谷地区の墓地

字甚光院

甚光院は大谷、御崎谷、出土谷が俯瞰できる栃畑谷の丘陵突端に位置し、佐毘売山神社の北東150mに所在している。字「甚光院」というように、かつて付近に寺院が存在していたと想定されるが、確かな伝承も少なく寺院の性格や存続期間は不明瞭である。

丘陵頂部や緩斜面、南側平坦面に石造物が確認されている。16世紀末から丘陵頂部及び斜面において造墓が開始され、17世紀初頭には造立数は最初のピークを迎える。この中には総高が180～190cm前後となる大型の墓塔も含まれることから、銀山最盛期を担った「山師」等の墓である可能性が考えられている。丘陵上での造墓活動はこれ以降減少傾向となり、17世紀後半には停止している。一方、南側平坦面では17世紀後半以降に造墓が始まる。18世紀以降の墓標を中心とする墓域であるが、丘陵上の墓域が飽和状態となり、こちらに移動したものと推測されている。

南側平坦面に墓域が移動してから墓標が出現するまで、すなわち17世紀後半から18世紀前半にかけては、それ以前と比べて造墓数は低調である。18世紀中葉以降の造墓数は順調に増加しており、こうした造墓数の増減の様相は昆布山谷地区の墓地と似たような傾向を示している。この墓地は当初は浄土宗寺院の墓地として造営されているが、1770年代になると浄土真宗の墓が現れ、以後は2つの宗派の墓が共存していることが明らかとなっている。

以上のように昆布山谷地区を中心とする墓地・石造物の様相を概観してきた。各墓地とも多少の相違は認められるものの、造墓数の推移についてはほぼ一致しているようである。再度述べると、17世紀初頭から前半にかけて1つの

ピークがあり、その後、17世紀中葉から18世紀前半頃までは大幅に減少するが、18世紀中葉以降は再度増加する傾向にある。

この要因については銀や銅の生産量の変動などが影響していると考えられるが、昆布山谷集落の変遷を考えたとき、この石造物の推移の様相から、ある程度の景観復元は可能と考えられる。(今岡)

IV. 石垣調査

石見銀山の景観や集落の変遷を考えるにあたり、石垣の景観がしめる割合は大きいと思われる。

そこで、石積みや石垣から時期変遷を辿ることを目的に、基礎的な調査の一環として石垣の編年図を作成することになった。

平成25年(2013)～平成30年(2018)の間、大森・銀山地区内において、構築年代の分かる石垣、あるいは推定できる石垣を対象に、特徴的な箇所の実測作業をおこなった。また、発掘調査で検出された推定時期が分かる石垣においても実測図を掲載した。そして、作業途中に石垣の積み方などに、大きな違いがあることが分かり同時に分類作業もおこなった。

分類

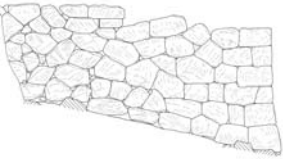
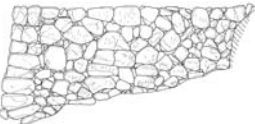
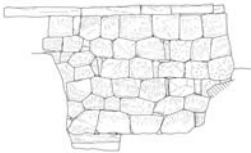
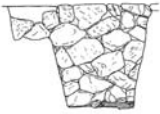
自然石のみで積んだ石垣は都合上除き、割石または切石で構築された石垣を対象とした。

I 類

割石と切石を使用し、大小の石材を組み合わせ乱積み、もしくは落積みのもの。石材は自然石や割石もしくは一部加工したものを使用。また、隙間が多く見られ小石を詰めているところもある。隅部は算木積みとしている。多くは、一般的な敷地の地割りなどに見られた。これは構築コストが低いためか、あまり視覚的効果を重要視しない石垣に採用されるケースが多かったと思われる。ただ、時期的な相違もあるため一概には言えない。

II 類

切石を使用し、石材を多角形に加工して隙間なく積み上げ、乱積みと亀甲積みの中間的様相のもの。切石は丁寧に加工され、表面には鑿痕

類別 時期	Ⅰ 類	Ⅱ 類
17c後	 昆布山谷第5地点 SK04石積(17c後半)  昆布山谷第5地点 SK03石積(17c後半)	
18c前 18c中	 18c後半 17c後半 昆布山谷第5地点 道石垣(17c後半～18c後半)	
18c後	 出土谷 敷地割り石垣(18c後半)	 昆布山谷第6地点 道石垣(18c後半)
19c前	 昆布山谷第4地点 敷地割り石垣(19c初)  昆布山谷第5地点 敷地割り石垣(19c初)	
19c中	 栃畑谷 佐毘売山神社 地割石垣(19c前半)	 栃畑谷 佐毘売山神社 拝殿石垣(19c前半)  大谷 神宮寺石垣(19c中)
19c後	 藤田組 事務所跡(栃畑谷)石垣(明治19年)	 下河原 豊栄神社本殿石垣(幕末)  藤田組 栃畑谷所在火薬庫石垣(明治20年)
20c前	 藤田組 清水谷製錬所跡石垣(明治27年)  藤田組 休谷所在火薬庫土手石垣(明治28年)	 大谷 高橋氏碑石垣(明治41年)

第 3 図 銀山区域内石垣分類編年図

が明瞭に残る。中には、石材の周囲に2～3cm幅で平鑿による丁寧な仕上げがされているものもある。これは、現地で加工・施工されたものと見られる痕跡である。このⅡ類は、現段階では18世紀後半まで遡ることができ、社寺・商人・重要施設などに多く見られた。これは、構築コストが高いとみられ、視覚的効果が重要視される寺社や重要施設に採用されたと思われる。また、銀山地区内では18世紀後半以降、両類は並存している。(分類表は銀山地区内を対象としている。)

時期区分

資料が充分ではないが、現段階での分類表から三つの画期が読み取れる。1期は18世紀後半以前のⅡ類がまだ出現せず、Ⅰ類のみの時期である。2期は18世紀後半以降のⅠ類とⅡ類が並存しつつ、規格品でない石材を積み上げる時期。3期は明治に入り比較的積み方の特徴がなくなる時期と大まかに分けられる。

石材と石工

石材に関しては、流通コストの違いが大きいと思われることから地元産(大森や久利など)か、それ以外とに分けられる。石工に関しては、在地の石工によるものか、他地域からの出稼ぎによる石工によるものかは不明である。また、報酬によっても当然加工の仕方が変わってくるものと思われ、Ⅰ類とⅡ類で石工が別人であるとも言い難い。例えば、清水谷製錬所の石垣においては主要部と思われる石垣はⅡ類であるのに対し、屋外にあたる部分はⅠ類の加工・積み方である。同じ石工でなくとも、棟梁(技術者)クラスは重要部を、他の者は棟梁の下請けでその他を請け負うという同一石工集団内での作業の違いということも考えられる。同様に佐昆売山神社においても、拝殿正面の誰もが目に付く場所はⅡ類、敷地の石垣においてはⅠ類の積み方である。

このように、用途・重要性・見せ方などによる石垣の使い分けがされていることがよく分かる。今後、自然石のみを使用する積み方の分類追加、石材の解明、石工の特徴・流れ、周辺の

山陰地方との比較・山陽地方との関連性、他の天領内での違いなど、まだまだ基礎となる調査が必要である。(尾村)

3. 昆布山谷・出土谷地区の景観と変遷

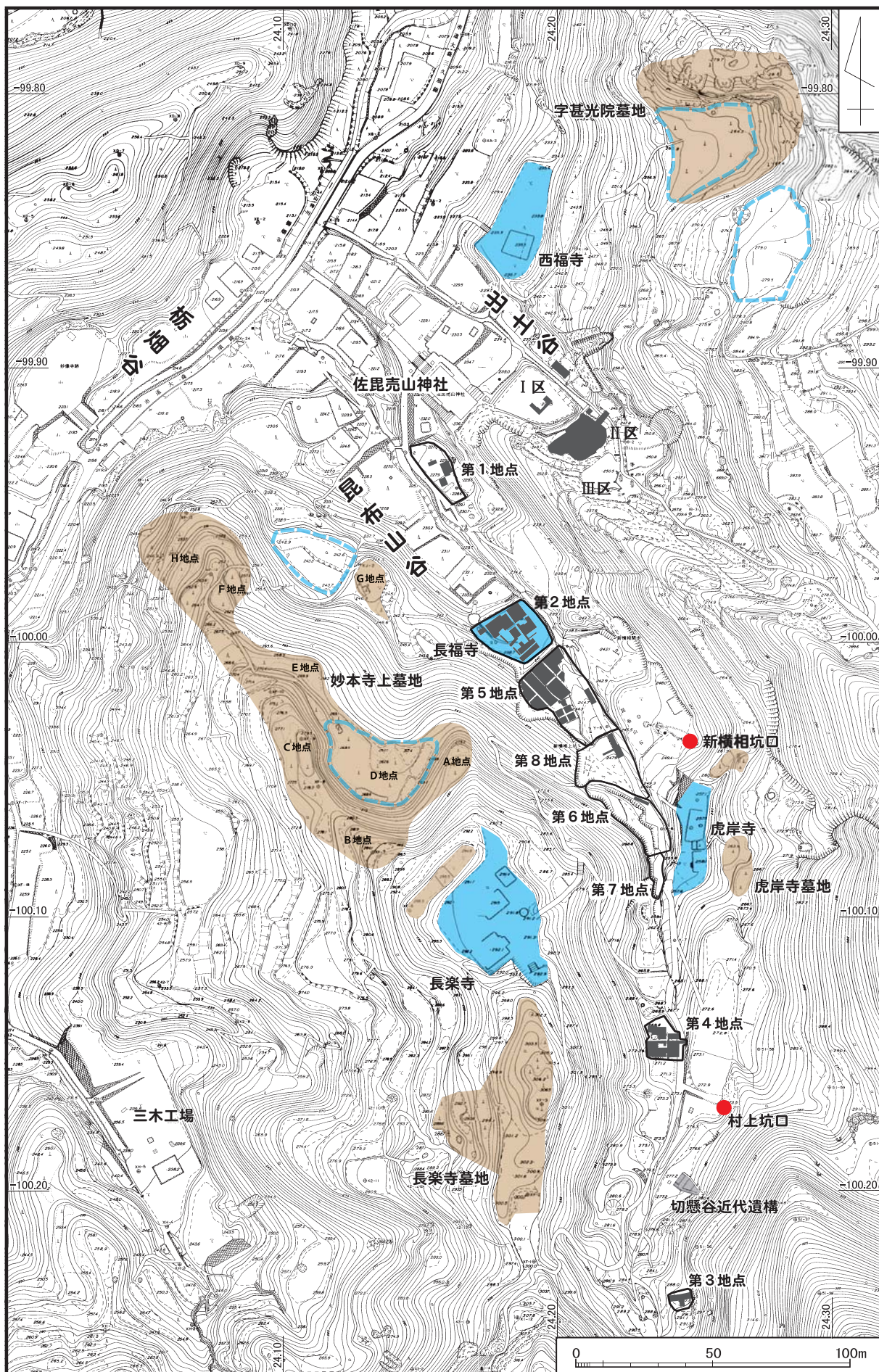
Ⅰ. 景観変遷の時期区分と概要

鉱山が開発されると、周辺部に関連施設や町屋ができ、鉱山町が形成される。石見銀山の昆布山谷・出土谷地区もその一部であり、銀山発見の16世紀前半より休山した20世紀の前半までの400年にわたる歴史をもつ。

中世から近代にかけて、銀や銅の産出量はそれぞれの時代で変動がある。そのことが、人口の増減、さらに町の盛衰にも大きく影響を与え、結果的には時期別の景観を作り出していった。

以下、遺跡の分布調査と発掘成果を基に、文献史料や墓石の紀年銘を参考にして、昆布山谷・出土谷地区の景観変遷を7区分して以下に記述してみたい。

- Ⅰ期 16世紀代** 銀山発見から毛利氏支配下の銀山の開発初期にあたる。遺構は未確認。
- Ⅱ期 17世紀前半** 大規模に採掘が行われた時期である。谷合いに製錬施設があり、尾根上には寺や墓地が造られている。
- Ⅲ期 17世紀後半** 銀生産が減り、衰退期となる。
- Ⅳ期 17世紀末～18世紀前半** 発掘調査では遺構・遺物が減少する。
- Ⅴ期 18世紀後半～幕末期** 銅が生産の主体となるが、生産量は縮小する。谷合は、道を機軸に、大規模に区画され、製錬遺構や住居跡が確認されている。
- Ⅵ期 19世紀後半** 明治初期で、民間資本が継続して鉱山経営にあたっている。明確な遺構等は未検出。
- Ⅶ期 19世紀末～20世紀前半** 藤田組が操業を始め、大規模に近代化を図る。谷合には藤田組の関連施設が造られる。



第4図 毘布山谷・出土谷調査区・施設位置図 (1 : 2,000)

1923年（大正12）に休山。
20世紀後半～現在 戦時中再開発。
1943年再度休山。戦後、谷合も山林化が進む。

Ⅱ. 昆布山谷・出土谷地区の景観

Ⅰ期（16世紀代）

戦国時代の大永7^①（1527）年に、石見銀山が発見され、石銀地区を中心とする仙山一帯で、銀の採掘が始まった。同時に鉾山町も出現し、後に「銀山六谷」と呼ばれる大谷、休谷、下河原、栃畑谷、昆布谷、本谷では、鉾山関係者が多く暮らすようになる。銀の生産も16世紀後半には飛躍的に伸び、東アジアの経済活動に大きな影響を与える鉾山として遠くヨーロッパまで知られることとなった。

しかし、この時期の状況を伝える文献史料は少なく、さらに昆布山谷・出土谷に関しては今のところ断片的な出来事しか知り得ない。『銀山旧記』によれば、天文8（1539）年、大内（蔵）丞、坂次郎、采女丞等が昆布山で、銀を製錬し、大内氏に毎年500枚運上銀を献納した。また、『銀山記』と『おべに孫右衛門縁起』には、天文11（1542）年8月、仙山の大風雨により昆布山谷で洪水が発生し、1300人が死亡したと記されている。この人数については確証がないものの、大規模に森林が伐採された鉾山や山間の町では、当初から洪水に悩まされていたことを伝える記事である。

これまでの発掘調査においては、昆布山、出土谷両地区での16世紀代の建物跡や製錬遺構は検出されていない。さらに、出土品の中にも、16世紀代のものはほとんど確認されていない。よって、今の段階では考古資料からは当時の様子復元することはできない。

一方、石塔は尾根上には多く残っている。銘文の中で、最も古い年号としては、昆布山谷の妙本寺上墓地に天正13（1585）年のものがあり、また、同谷で文禄3（1594）年のものが長楽寺跡にある。出土谷でも1594年の石塔が甚光院跡にあり、同谷では最も古い。その後、江戸時代にかけて多数の石塔が建て続けられ、昆布

山谷の南側の尾根部を中心に墓地として使われていった。この尾根には、大きな平坦面が点在しており、石塔が多く存在することや地名からすると寺跡の可能性が高い。

また、「上野家文書」「高野山浄心院古檀家姓名録」^②には、石見銀山の住民で、高野山に石塔を建てた人や、お初穂を納めた人の名前、年月日が書かれており、16世紀代では30人程の名前が出てくる。その中で最も古い記載は、出土谷では天文3（1534）年11月17日の「出し土手島惣右衛門」であり、昆布山では天文8（1539）年3月23日の「昆布山 松ヤ三郎、次郎」である。この史料からは銀山発見後の早い時期に、昆布山谷や出土谷には、人々が住み始め、町が形成されていたことが窺える。

同じ姓名録には、「昆布山 古岩寺 天文20年」の記載もある。現在、昆布山谷（東18～21）の平坦面に虎岸寺跡があり、裏山には江戸時代の墓地も残る。この寺が天文20（1551）年には、昆布山谷に存在していたことを裏付けるものである。なお、『資料毛利氏八箇国御時代分限帳』（マツノ書店、岸浩、1987）には、邇摩郡の神社の項に5石「山神ノ主」とある。これより山神（佐毘売山神社）が銀山に存在していたことは知れるが、現在の場所かは不明である。なお、同項には7.12石「佐摩大森ノ大明神」の記載もある。（西尾）

Ⅱ期（17世紀初頭～17世紀前半）

この時期は、昆布山谷の各地で開発の痕跡が検出されている。第3地点、第4地点、第5地点では、下層確認トレンチが岩盤にまで達しており、いずれにおいても岩盤加工遺構を検出している。基本的な加工は、岩盤を削平して平坦面を形成するもので、岩盤を削り取って敷地を確保しようとする意図がうかがえる。中でも、第5地点Ⅰ区で検出された岩盤加工遺構は、大規模に平坦面を削平し、縦横に溝を掘り込んでいる。また、このような岩盤の加工痕は、第1地点、第7地点、第8地点でも確認されている。これら3地点の加工痕は、伴う遺物が出土していないため構築時期は明確にし得ないが、

17世紀初頭と考えられる昆布山谷地区第3～第5地点の加工痕と共通する点が多い。こうした加工痕は、調査したほとんどの地点で確認されていることから、同様の加工が谷全体に及んでいたものと推定され、大規模な造成工事を伴う開発が行われていたことを裏付けるものである。

また、出土谷地区の調査においても、Ⅱ区の下層確認トレンチの調査により、少なくとも17世紀初頭には開発が始まっていたことが確認されており、同様にⅡ区では岩盤加工遺構も検出されている。こうした成果から、出土谷を含めた昆布山谷一帯で、17世紀初頭には大規模な開発が行われたものと推定される。

このような開発行為の実態については不明な点が多いが、時期的に江戸幕府の開幕に重なることから、幕府主導により大資本が投入された可能性も考えられる。また、民間資本による開発であっても幕府による優遇措置がとられていたことも考えられる。

さらに、第5地点Ⅰ区の調査では、岩盤加工の直上に15～20cm程度盛土、整地をして製錬炉（SX17～19・30）や溝（SD09）等を構築して

いる。17世紀前半から中頃の遺構と推定され、当地においては比較的短期間に改修や建替えが行われていたものと考えられる。

この時期のことを記した文献史料は乏しいが、慶長7（1602）年に、大久保長安が大森の町普請を指示したことを示す史料が残っており⁽³⁾、この時期に大規模な造成工事が行われていることから、昆布山谷を含む銀山町にもなんらかの普請の指示が出されていた可能性は否めない。また、発掘調査ではまだ痕跡を検出していないが、慶長8（1603）年には銀山大火があり、三千軒が消失し、山神社も類焼したという史料もあり⁽⁴⁾、大久保長安が再建したとある。

当時の景観を考える上では、絵画資料も有力な手がかりとなる。現在、元和年間作成の「元和年間石見国絵図」⁽⁵⁾や、正保2年に作成された「正保石見国絵図」⁽⁶⁾等が知られており、銀山の様子をうかがえる貴重な資料となっている。それぞれ、元和年間、正保年間の様子を書き記したのと考えられており、この中で、昆布山谷に相当する場所には、仙ノ山の南側に抜ける道と、その両側に町並みが描かれており、当時はすでに町並みが形成されていたものと見



第5図 昆布山谷5地点Ⅰ区

てとれる。また、「正保石見国絵図」には、「御吹屋」の建物が描かれており、昆布山谷か栃畑谷かは判然としないが、「吹屋」である製錬施設が存在していたものと考えられる。

その他、石造物調査の行われた長楽寺墓地、字甚光院墓地、妙本寺上墓地については、紀年銘が判読できた墓石の年代別の変遷図が作成されている（第10図～第12図）。これまでの調査成果から、妙本寺上墓地の変遷傾向が銀山柵内全体の傾向とほぼ一致している。また、Ⅰ期の項で指摘したとおり、いずれの墓地も最古の墓石は1500年代まで遡るが、17世紀初頭に造墓のピークを迎えている。これらの墓石は宝篋印塔や五輪塔といった墓塔系の墓石が中心で、山師など富裕層の造墓状況を示していると考えられている。このため、単純に人口の多寡を反映しているとは言い難いが、少なくとも、この時期に人口増加を伴う大きな画期が存在していたことは示していると思われる。

これらの墓地は、いずれも谷を取り囲む尾根

上に立地している。長楽寺以外の所在地は明確ではないが、墓地の近くに広い平坦地が確認されていることから、寺域であった可能性が指摘されている。

こうした成果から、17世紀初頭には、谷内には大規模な造成によって形成された平坦面上に町屋が立ち並び、周囲の尾根周辺には寺院と墓地が形成されていたと推定される。

Ⅲ期（17世紀後半）

17世紀後半になると、遺構が確認できる地区が大きく減少する。谷奥で、谷幅も狭まる第3地点では17世紀初期に岩盤を加工して以降、幕末頃まで遺構が確認出来なくなる。第1地点、第2地点でも、下層確認トレンチが当該期まで掘り下げていないこともあり、確認出来ていない。出土谷においても、17世紀後半～18世紀前半までの遺構は確認されていない。

こうした中で、昆布山谷第5地点のⅠ区では、17世紀初頭、17世紀前半、17世紀後半と連



第6図 元和年間石見国絵図（銀山柵内部分）



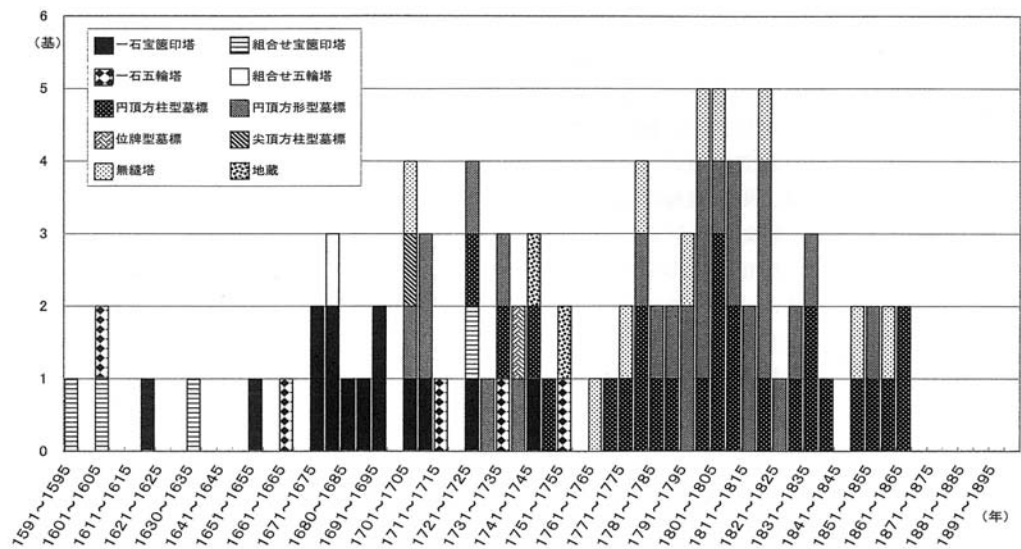
第8図 正保石見国絵図（銀山柵内部分）



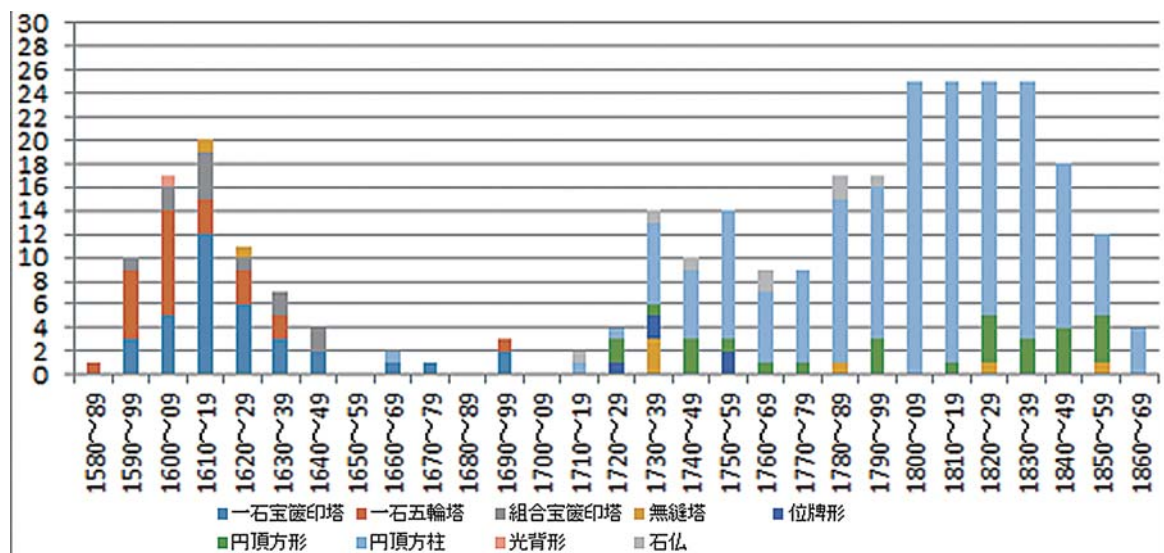
第7図 元和年間石見国絵図（昆布山谷周辺部）



第9図 正保石見国絵図（昆布山谷周辺部）



第10図 長楽寺墓地造墓状況



第11図 妙本寺上墓地造墓状況



第12図 字甚光院墓地造墓状況

綿と遺構が継続して確認されている。特に、17世紀後半においては、大規模な石組み水溜遺構（SK03・SK04）や、溝を伴う製錬炉（SX28・SD05）等が検出されており、他地点とは大きく様相が異なっている。また、第4地点でも下層確認トレンチで、この時期と推定される石垣を伴う平坦面を確認している。

こうした成果から、昆布山谷、出土谷では全体的には活動空間も狭まり、衰退傾向にあるものの、場所によっては本格的な生産体制が維持され、それに伴う施設も整備されていたものと推定される。

この時期の様子を記した絵画資料は確認されていない。ただ、延宝3（1675）年に奉行制から代官制に移行している。このことは幕府の機構整備の一環としての措置とも捉えられている⁽⁷⁾が、発掘調査成果とも合致している。

谷周辺の造墓状況を見ると、字甚光院墓地と妙本寺上墓地ではこの時期に造墓が減少しており、人口の減少を反映したものと考えることができる。一方で、長楽寺墓地については、17世紀後半～18世紀前半にかけて逆に造墓が増えている。

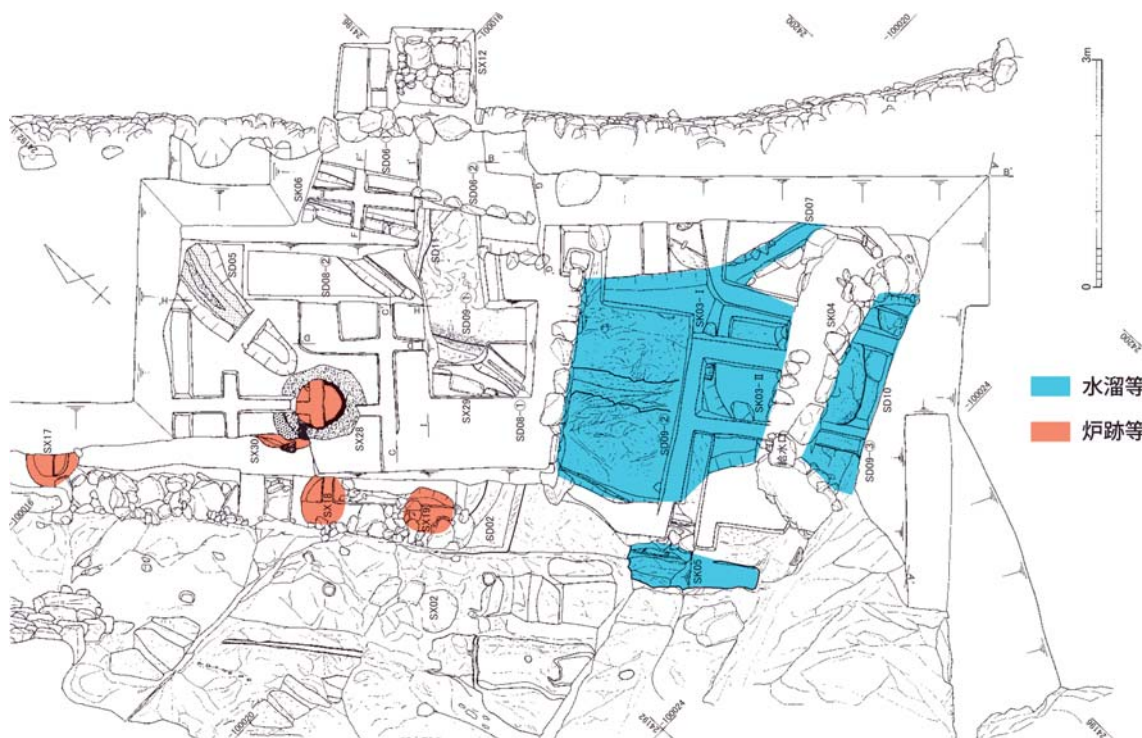
昆布山谷の発掘調査成果では、第5地点のよ

うに部分的には本格的な生産施設が維持、経営されていたことが判明しており、一様には衰退していない複雑な様態が明らかとなっている。こうした状況の中で、長楽寺がこの時期に生産に従事した者や、当地に居住した人々の信仰と造墓を担っていたことが推察される⁽⁸⁾。甚光院などは早々に記録に見えなくなるのに対し、長楽寺は明治5（1872）年に地震の被害を受け、明治10（1877）年に神宮寺に合併されるまで、昆布山谷の尾根上に存続していたことが知られており、江戸時代を通じて当地に深いかかわりを持っていた。

こうしたことから、17世紀後半の昆布山谷周辺は、産銀量の減少に伴い谷全体に展開していた生産、居住空間は第4地点より下流に限定されるようになったと推定されるが、そうした中でも、第5地点のように集中的な生産施設が設けられるなど、一部においては活況を呈する状況であったと考えられる。

Ⅳ期（17世紀末～18世紀前半）

この時期は、Ⅲ期に引き続き遺構の検出は低調である。第5地点Ⅰ区においても、18世紀前半には遺構面は存在するものの、積極的な土地利



第13図 昆布山谷第5地点Ⅱ区遺構配置図（1：100）

用は行われておらず、第5地点Ⅰ区はユリカス・ズリの廃棄場となっている。逆に考えれば、この第5地点Ⅰ区ではないものの、付近では選鉱作業が行われていたことを物語っており、谷内では生産活動が引き続き行われていたことになる。このように頻繁に作業場が変更されていく背景には、間歩の開発状況が密接に関わっているものと考えられ、採掘が行われている間歩の近くに作業場が移って行ったものと考えられることができる。

第5地点Ⅱ区では、下層確認トレンチで18世紀代の遺構面を確認しており、18世紀後半まで存続していたと推定されているが、調査面積が僅かであるため、明確な遺構は検出されていない。

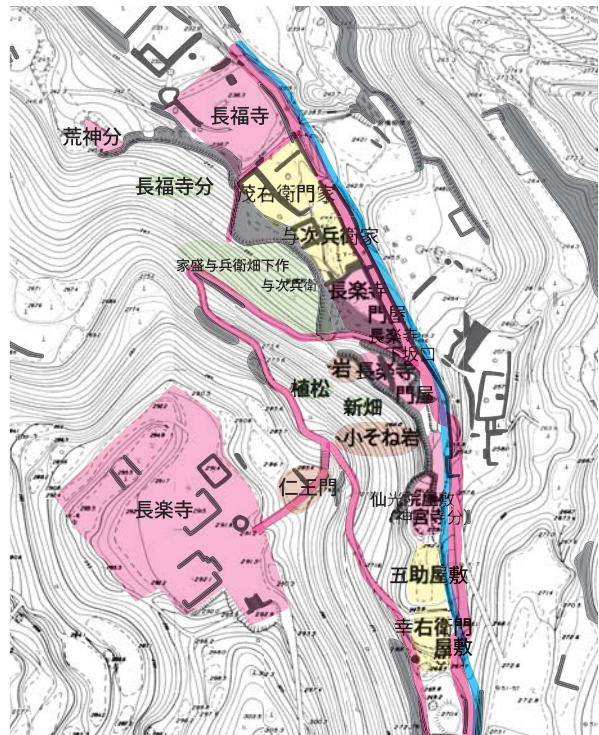
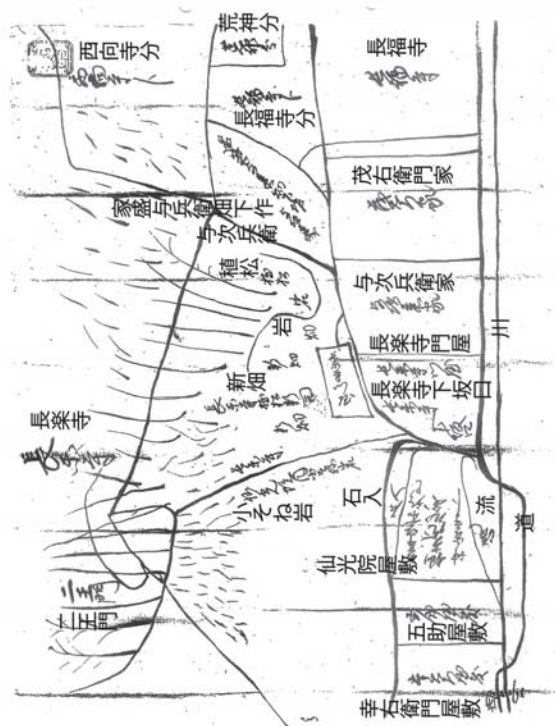
第4地点で検出された17世紀代の石垣と平坦面については、調査範囲が狭小であったので、存続期間が明確ではなく、18世紀代まで存続していた可能性は残るが、当該期の遺物の出土量からみて、積極的に利用されていた可能性は低い。

この時期の様子が分かる文献史料に「安田家文書」の正徳6（1716）年「長楽寺・仙光院の境界絵図」⁹⁾が知られている。これは、水害に

よって石垣が流失したことにより、土地の境界を証明するための絵図及びその説明文で、概ね、第2地点から第4地点あたりまでの、谷左岸から尾根上までが描かれている。その絵図と記載内容を現地形に反映させたものが第14図である。この中で、敷地の記載には「〇〇家」と「〇〇屋敷」と使い分けがされている。「家」は建物を伴う敷地で「屋敷」は建物を伴わない敷地のみの場所と解釈することが出来る。よって、この時点では長楽寺下坂口より上流の3箇所については敷地のみとなっていたと推定され、上流側は空き地の多い地域となっていたと見てとれる。

また、最も下流の敷地には長福寺と記されており、明治期の地番などから第2地点の平坦地と推定され、この時点では、この場所に長福寺が存在していたことになる。

図中で、発掘調査を行った第5地点については、「茂右衛門家」¹⁰⁾と記載されている。この地点の西端（Ⅰ区）は当該期にはユリカス・ズリの廃棄場となっていることが判明している。また、敷地中央部（Ⅱ区）は上層で検出した建物跡を破壊しないよう、一部トレンチによる調査を行ったのみであるが、18世紀代の遺構面を検



第14図 正徳6年「長楽寺・仙光院の境界絵図」(左)・及び現地形での推定地(右)

出しており、調査では検出できなかったが、建物が建てられていた可能性は残る。

長楽寺下坂口推定地では、発掘調査により、岩盤を掘り込んだ道跡が確認されている。道路脇には現在も地藏が安置されており、石造物を安置したと思われる岩窟も確認されていることから、長楽寺参道の可能性が極めて高い。この道路遺構の年代は、出土遺物が乏しく明確には出来ないが、絵図と位置が一致しており、現状の姿になっていたかどうかは別にして、当時にはすでにこの場所に参道が存在していたとみて良いであろう。

一方、仙光院屋敷と記載されている敷地について、同史料では、50～60年前に居住した仙光という山伏が名前の由来であるとしており、正徳6年当時は長楽寺門屋の者が耕作している記載があることから、すでに畑地になっていたことがうかがえる。推定地内では、幅、高さが共に1.7m程の岩窟が現存しており、奥壁では小窟と刻書が確認された。出土遺物が無く、明確な時期は不明であるが、正徳6年にはすでに畑となっていることから、岩窟の掘削はそれ以前と推定され、仙光が居住した時期に、何らかの



第15図 長楽寺下坂口推定地の階段遺構

宗教施設として掘削された可能性も考えられる。

周辺の造墓状況を見ると、妙本寺上墓地では18世紀前半から造墓が増えているが、全体としての傾向は前述の通りである。一方、谷右岸の平坦地には虎岸寺跡があり、石造物調査も実施されている。墓石の年代別変遷図は第17図の通りで、最も古い墓石は享保5（1720）年となっている。長楽寺墓地、妙本寺上墓地、字甚光院墓地の造墓開始年代が16世紀に遡るのと比較して明らかに後出する墓地である。立地を見ても、長楽寺他の寺域、墓地は尾根上にあるのに対し、虎岸寺は谷内の平坦地に立地している。

I期の項で述べているように、虎岸寺は16世紀代から昆布山谷に所在していたと考えられていることから、本来尾根上に立地していたものが享保年間に現在地に移転してきたものと推定される。また、長福寺も正徳6（1716）年時点では、第2地点に所在していることは前述の通りであるが、墓地については妙本寺上墓地G地点に棲み分けをする形で造墓されたと指摘されており⁽¹¹⁾、墓塔系の墓石を除けば、18世紀初頭から造墓が開始されている。こうした造墓状況から、長福寺も17世紀末から18世紀初頭に移転してきた可能性が考えられる。

一般に、石見銀山の寺院については、元来は山上に立地していたものが、時代が下るにつれ、山麓に移転する例（清水寺など）が知られており、虎岸寺と長福寺についても、元の間所から移転した例と推定されるのである。

こうしたことが可能となったのは、正徳6（1716）年には長楽寺下坂口上流の敷地が、すでに建物が建っていなかったように、人口の減



第16図 仙光院屋敷推定地の岩窟

少により、谷内の平坦地に多くの空き地が生じていたことが背景にあると考えられる。

こうした成果から、17世紀末～18世紀前半頃の昆布山谷は、生産、居住は継続されているものの、建物が減少し、空き地が多くなっていたと推定される。空き地は畑として利用されていたほか、尾根上にあった寺院が谷内の空き地に移転する状況にあったものと推定される。

V期（18世紀後半～幕末）

この時期になると、再び各所で遺構が検出されるようになる。出土谷Ⅱ区では製錬施設を3基伴う礎石建物が検出され、No.247間歩と同時期に機能した建物と推定されている。出土遺物から18世紀後半頃の建物とされているが、肥前陶磁器でも外青磁と端反の碗がほとんど出土せず、広東碗が主体であることから、18世紀でも第4四半期以降から19世紀初頭という短期間での操業であったと推定できる。製錬炉は銅生産に関連したものと考えられており、当該期には銅生産が本格化していたことを示す遺構と評価されている。製錬所として使用されなくなった後には、幕末まではズリの廃棄場となっており、調査時には、直径8m、高さ4mのズリ山となっていた。

昆布山谷4地点では、18世紀終わり頃に、以前の石垣を埋めて、新たに石垣で敷地を造成し、その上面に、礎石建物（SB01）が建てられている。建物は、南側に通り土間とカマドを

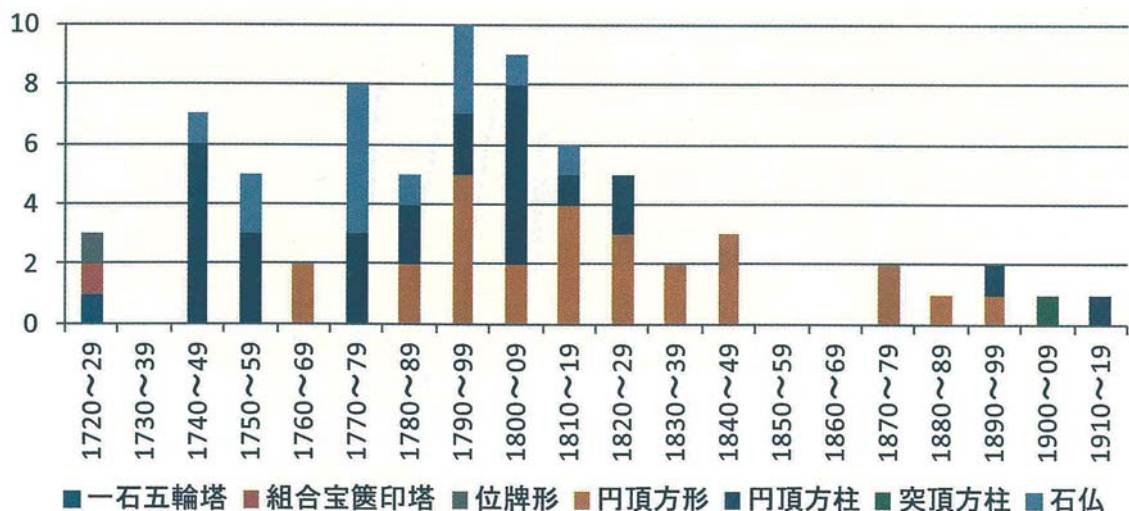
持ち、床部分では一部に根太が残存していた。その床下に相当する位置で、一辺1.7m程度の方形土坑も検出しており、床下収納の可能性が考えられている。建物の入口は、通りに面した南東側に設けられていたと推定され、平入りの建物であったと推定される。出土遺物から、幕末頃まで存続したと考えられる。

昆布山谷5地点では、18世紀終わり頃に、ズリ山となっていた敷地西側に、石垣を築いて2段に造成し、上段と下段にそれぞれ礎石建物を建築している。上段の建物（SB01）は、礎石が石垣の直上に設置されており、敷地いっぱいまで建てられていたことが判明している。出土遺物が少ないことから、居住用の建物ではなく、倉庫などであったと考えられる。

下段の建物（SB02）は、桁行5間（12m）×梁間2間（4m）以上の建物で、仮に5間×3間としても建物面積が72㎡以上の建物が想定される。鍋や食器類が豊富に出土しており、居住用の建物と思われ、これらの出土遺物から幕末まで存続していたものと推定される。また、出土遺物の中には急須の蓋も含まれており、居住者は煎茶を嗜める階層、文化程度の人物であったことがうかがえる。

第1地点及び第2地点では、当該期の礎石建物と炉跡を検出している。建物はいずれも礎石のみの検出で、規模等は不明であるが、炉跡は2基とも直径90cm程度の円形状を呈する。

第1地点は、No.229間歩の前面平坦地に設定



第17図 虎岸寺墓地造墓状況

したトレンチで、炉跡はNo.229との関連が示唆されるが、間歩の操業面と、炉跡検出面の関係性については確認できていない。

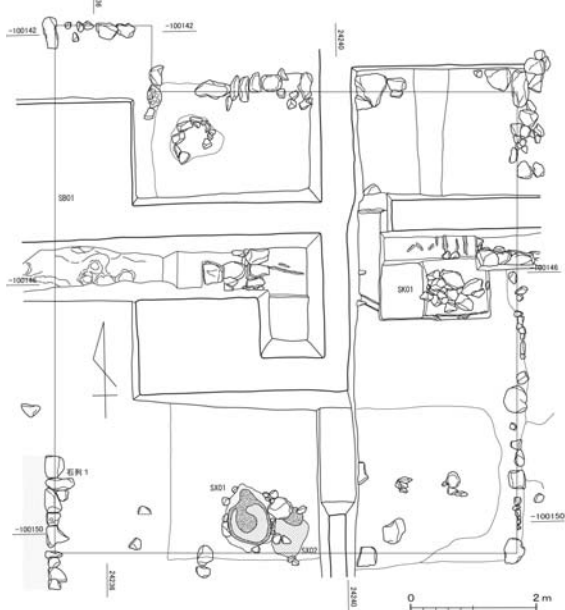
いずれの建物も吹屋と考えられるが、第2地点については、当時、長福寺が存在していたと考えられており、両者の関連性については不明である。また、第2地点においては明治期の建物が検出されているため、長福寺に関連する遺



第18図 出土谷地区II区



第19図 昆布山谷4地点SB01



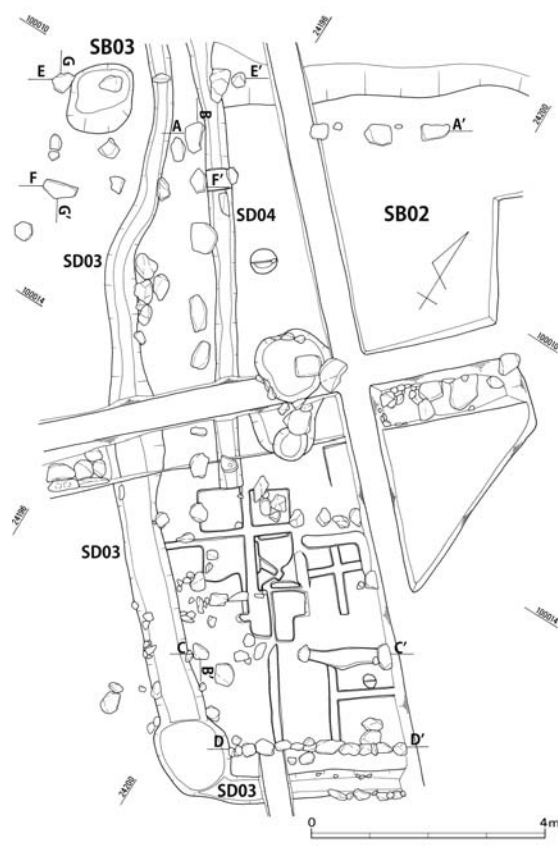
第20図 昆布山谷4地点SB01

構は確認されていない。

第8地点では、18世紀後半に構築されたと推定される石垣が検出され、前面には道跡も確認された。石垣上には礎石も検出されており、石垣上の平坦面には礎石建物が建てられていたと推定される。道路面上には上部から落下したと考えられる木舞こまいが検出され、石垣上の礎石建物は土壁を有する建物であったと考えられてい



第21図 昆布山谷5地点SB02



第22図 昆布山谷5地点SB02

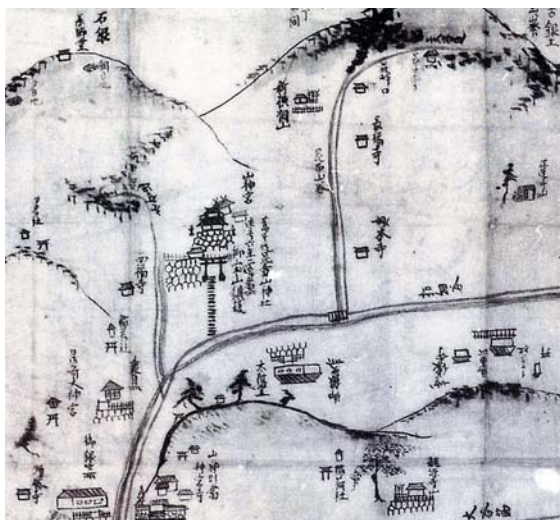
る。この建物については、木舞が道の直上に落下していることから、幕末から明治初期には崩落したものと推定され、幕末までに使用されなくなった可能性が高い。

その他、この時期の資料は17世紀前半期に比べ飛躍的に増大しており、景観復元についても一定の成果が示されている⁽¹²⁾が、紙面の都合もありここでは割愛する。

絵図については、寛政元（1789）年の記載がある「石見銀山麓絵図」⁽¹³⁾（第23図）や文政年間作成と考えられる「銀山町絵図」⁽¹⁴⁾（第24図）が確認されている。

昆布山谷付近を見ると、「石見銀山麓絵図」では、谷の右岸には「新横相山」が、谷の左岸には上流側から「長楽寺」、「萩峠口」、「長福寺」、「妙本寺」が描かれている。一方「銀山町絵図」では、やや蛇行する川に2本の橋が架かり、右岸には「新横谷四ツ留番所」、左岸に「萩ノタオ番所」、山腹に「長楽寺」、「妙本寺」が描かれている。「新横相山」と「新横台四ツ留番所」は共に新横相間歩のことと考えられ、「萩峠口」と「萩ノタオ番所」は萩峠口番所と考えられ、両者の位置関係はほぼ一致している。また、やや位置は異なるものの長楽寺、妙本寺も描かれている。長福寺については「石見銀山麓絵図」には描かれているが「銀山町絵図」には描かれていない。

ここで注目されるのは萩峠口番所で、江戸時代初期に三久須境の尾根上に設置されたもの



第23図 石見銀山麓絵図（昆布山谷周辺部）

が、寛政元（1789）年の「石見銀山麓絵図」には新横相間歩の付近に描かれていることであろう。同様に萩峠口番所も妙像寺付近に描かれている。これは、寛政元（1789）年には番所が新横相間歩付近に移転していることを示唆している。人口減少により、建物数も減少したことで尾根上に設置する必要性が無くなり、利便性を優先して新横相間歩付近まで移転したことが考えられる。仮に、番所が新横相間歩付近に移転していたのなら、第5地点で検出した礎石建物を考える上で重要な情報となる。位置的にも時期的にはほぼ一致しており、煎茶が嗜める居住者の階層を考えると、第5地点の礎石建物が萩峠口番所であった可能性が浮かび上がる。

寺院等については前代に引き続き存続していたものと考えられる。

造墓状況を見ると、いずれの墓地も18世紀第4四半期から19世紀前半にかけて造墓が増えており、人口が再び増加したことを示している。これは、出土谷、昆布山谷で炉跡を伴う建物が検出されたこととも合致しており、銅生産の増加によって、人口も増え、再び活況を呈していた状況であったと推定される。ただ、幕末に向かっては再び減少しており、幕末頃には生産も落ち込んで、人口も減少していったものと推定される。

こうした成果を総合すると、18世紀後半から末にかけて、銅生産の活性化に伴い、石垣の再構築などの大規模な区画整理が行われ、新たな敷地には吹屋などの生産施設や、一般の居住用の建物等が建設され、中には石垣と土壁を有する建物も存在していたと推定される。公的な施



第24図 銀山町絵図（昆布山谷周辺部）

設では、すでに新横相間歩には四ツ留番所が設置されており、萩峠口番所も寛政元（1789）年までには新横相間歩付近に移転していたものと推定される。こうした活況も、幕末には生産量の低下により再び衰退したものと考えられる。（新川）

VI期

明治維新後、それまで幕府の支配下だった石見銀山は、新政府の管理下におかれる。しかし、具体的な施策が講じられないまま、明治5年（1872）に発生した浜田地震により坑道内は甚大な被害を受け、規模の縮小を余儀なくされた。長楽寺も、地震により建物が倒壊するなど大きな被害を受け、5年後の明治10年（1877）に、大谷地区に所在する神宮寺に合併されている。

この地震の影響で操業に大きな打撃を受けた石見銀山は、翌明治6年（1873）の日本坑法⁽¹⁵⁾の施行後、民間に払い下げられ、民営の鉱山となる。これを受け、松江市新材木町（現東本町）の商人安達惣右衛門や、地元有志らが鉱区を取得し、鉱山経営を行うようになる。

明治11年（1878）の「ライマンの山陰地質紀行」⁽¹⁶⁾によると、当時は安達惣右衛門ともう一つの業者が製錬所を持っており、毎日のように稼業していた、と書かれている。

安達惣右衛門は、明治6（1874）年から鉱山経営に乗り出しており、彼の製錬所は目貫道路から数100ヤード（1ヤード＝約90cm）入った場所にあると記されている。もう一方の製錬所は、明治10（1877）年から稼働しており、安達惣右衛門の製錬所から数100ヤードほど山の上に入った所に所在すると記されている。

ライマンの記載には、経営は両者とも、かなり小規模であったという。当時、大森には300の坑道があったが、稼業中の坑口は2つだけであった。また、旧式の揚水装置を使用していたため産出量が増えず、作業員の賃金を低く抑えることによって若干の利益が出るのみと記載している。

鉱山経営ばかりではなく、土地制度において

も大きな変革があった。明治4年（1871）に発令された上地（知）令により、多くの寺社の土地が接収されるが、昆布山谷、出土谷の寺院にも大きな影響があったと考えられる。上知令に関する絵図⁽¹⁷⁾（第25図）には、昆布山谷と出土谷には、長楽寺・妙本寺・長福寺・虎岸寺・西福寺の5つの寺が記載されており、これらの寺院が上地令により接収を受けたと考えられる。

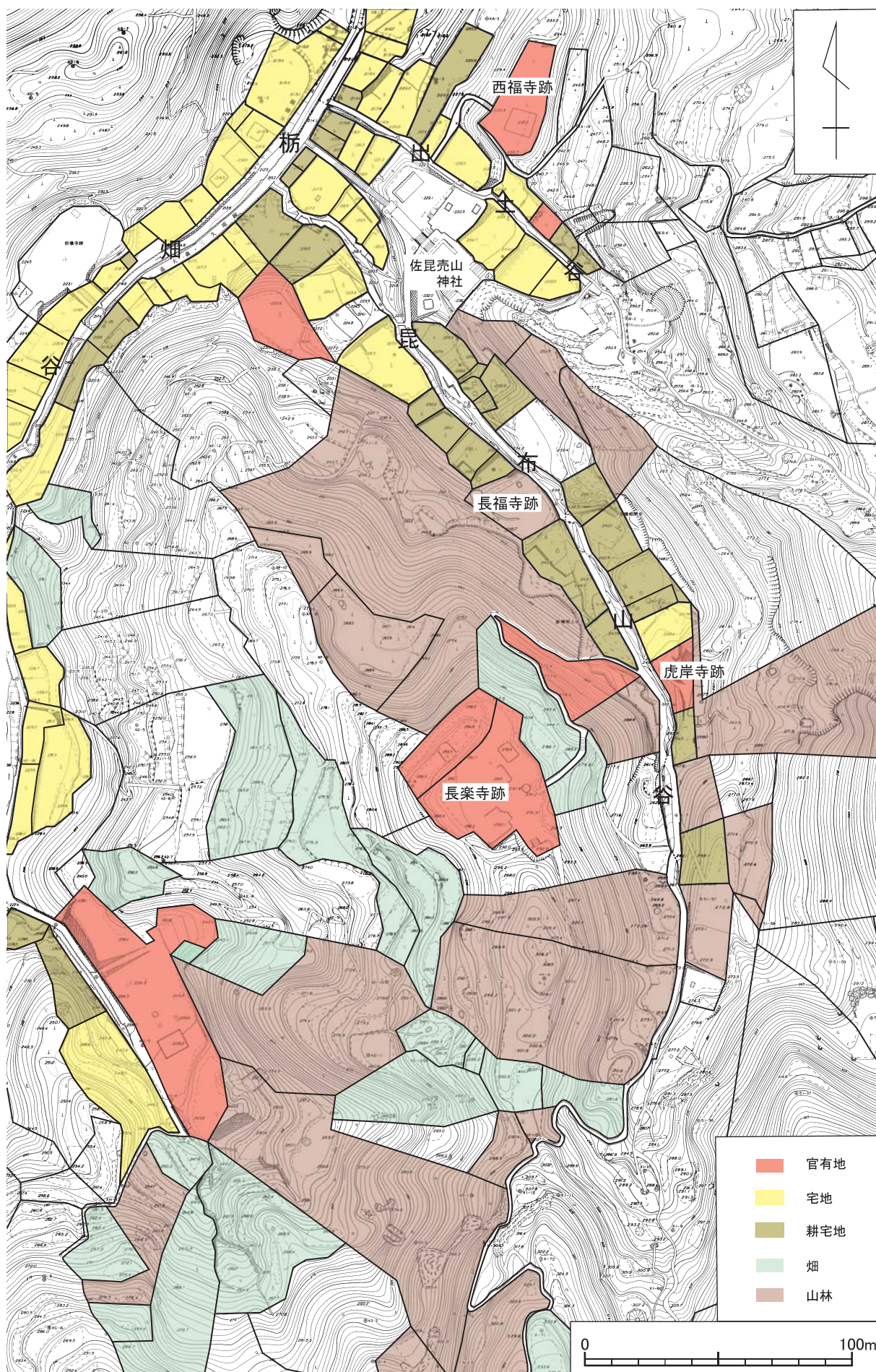
長福寺については、明治12年（1879）の同寺の関連史料⁽¹⁸⁾によると、本堂が6間×3間半で、境内の坪数が132坪（435㎡）、信徒は20人とある。しかし、その後の史料は見当たらず、この前後で廃寺となった可能性が高い。虎岸寺も、「要書録」の記載では「此寺所得檀家ノ無キ為維持ニ耐ヘ難ク、明治五^(ママ)六年ノ頃遂ニ破壊シ其後タル所ナシ」とあり、明治初期に破壊し、廃寺となったものと思われる。また、西福寺も詳細は不明であるが、現在建物等は存在せず、平坦面に建物の基礎跡だけが残る状況である。妙本寺に関しては、墓地群は存在するものの、本堂の場所については特定されていない。

このように、明治10年前後を境に多くが廃寺となり、尾根上の平坦面や境内地は荒れていったものと思われる。このことを示すように、明治10年から20年代と思われる切図⁽¹⁹⁾（第26図）には上記の寺院所在地は官有地となっている。

この切図を見ると、栃畑谷と佐昆売山神社周辺に宅地表記が多く見られる一方、昆布山谷では宅地として記載されているのは2か所のみである。谷の両側に見られる石垣で区割りされていた敷地は、ほぼ耕宅地となっている。そして、南の山手側に行くほど山林表記が増え、尾



第25図 上地令に関する絵図



第26図 昆布山谷・出土谷地区 明治10~20年代土地利用図 (S = 1 : 2,000)

根上や斜面の平坦面は、畑として活用されている。

また、明治9年（1876）に柵内を中心に道路と水路の規模を調査した「諸願伺届書」⁽²⁰⁾には、栃畑谷から昆布山谷の長楽寺参道入り口までは、道幅一間半の宅道であると記されている。その入口から南の山手側の道は、枝道となっており、この時点ではここまでが宅地として認識されていたことが分かる。これは、正徳6（1716）年の「長楽寺・仙光院の境界絵図」の記載とも一致する。

前項でも述べているように、Ⅲ期以降から徐々に人口が減少し、Ⅳ期には空き地が多く見られるようになる。Ⅴ期になると、銅生産により人口が再び増加するが、幕末にはまた減少していく。上記の史料は、こうした江戸期の土地利用の実態が、明治期まで継続していたことを示すものと言えよう。

このように明治に入り、浜田地震や土地令などにより、この地域はさらに衰退していったものと思われる。

Ⅶ期

明治19年（1886）からは、大阪に本社のある藤田組により鉱山開発が開始される。藤田組は、まず、既存の借区（鉱業権）と土地、製錬施設の取得から着手し、元山師であった小川兵市、井上房一、邇摩郡大国の田中義太郎らの所有する借区と所属物件などを買収している。翌明治20（1887）年には、本格的に開業し、借区を増区するなどして、最終的には周辺地域を含め、10万坪（33万㎡）の鉱区を獲得している。また、必要な土地の買収も進め、施設を次々と増設・新設している。

藤田組は、当初、昆布山谷、栃畑谷を中心とした銀山部と永久坑側からの開発を行った永久部とを設置し、2面展開で開発を進める。両部とも、明治5（1872）年の浜田地震により被害を受けた坑道の復旧を行いながらも、主力は既存の施設が集中する銀山部に置かれた。しかし、両面から開削が進められていた坑道は、内部で連結され、永久坑からの出鉱も盛んになる

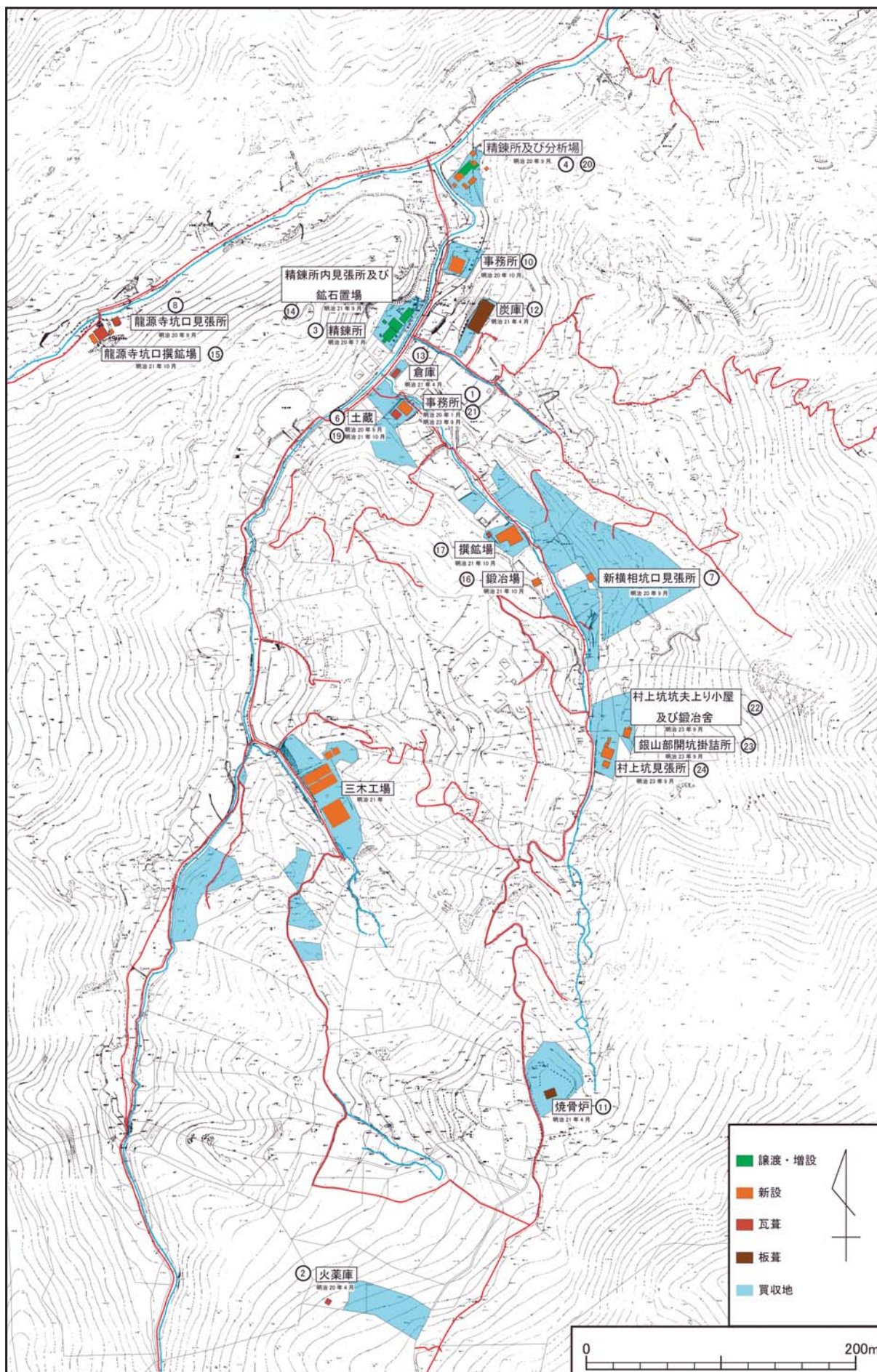
に至り、主力は永久側となり、明治25（1892）には大国の柑子谷に事務所が移されている。一時、銀生産を目指して清水谷製錬所を建設し、事務所も清水谷に置かれるが、不採算等により製錬所が休止されたことで、再び永久側に事務所が移される。そして、事務所、選鉱場、製錬所などの各施設を一か所に集め、新たに発電所を建設し、電動式排水ポンプや巻揚機も積極的に導入するなど、近代化を進めている。

しかし、大正9（1920）年の第一次大戦後の銅価格の急落により、収益がマイナスに転じ、加えて、熱水の湧出など採掘条件が悪化したことで、大正12（1923）年に溶鉱炉と事務所を廃止し、休山となる。

その後、藤田組を引き継いだ藤田組株式会社が再開発に着手している。これは、昭和13（1938）の「重要鉱物増産法」⁽²¹⁾の施行を受けたもので、昭和17（1942）年には、藤田組株式会社柵原鉱山の太森支社として再開している。しかし、昭和18（1943）年に起こった台風被害によって、坑道内や施設は大損害を受け、翌昭和19（1944）年操業を停止し、事実上の閉山となる。

こうした藤田組による開発の実態は、不明な点も多いが、「要書録」⁽²²⁾によりその一端を知ることができる。この「要書録」には、藤田組が取得、増築、新築した建物などが記されており、それによると、昆布山谷や出土谷周辺で事務所や見張所など、20余りの施設を建設していることがわかる。それらを地形図に反映させたものが第27図である。この中で、③・④の製錬所については、当初、小川兵市や田中義太郎らから買収した製錬所で、これらについては、Ⅴ期の項で述べた「石見銀山麓絵図」に記載された吹屋と位置が一致しており、江戸後期から存続していた施設と考えられる。

こうした施設の一部は、分布調査や発掘調査により確認されたものもある。分布調査では、第2図の東14で「藤田組太森鑛山所」と銘文の入った土瓶と茶碗が採集されている。同所では建物礎石も確認されており、第27図⑦の新横相坑口見張所と推定される。また、東22において



第27図 藤田組施設配置図 (S = 1 : 4,000)

も、同様の名前が書かれた茶碗が採集されており、ここも第27図②3の銀山部開坑掛（係）詰所が所在した場所である。東11や東22の平坦面は、現在広い平坦面となっており、ズリが厚く堆積している。切図や地籍図をみると、同所は狭い区画が連なっていることから、本来狭かった区画を、新横相坑や村上坑から搬出されたズリにより造成されて、現在の地形になったものと推定される。また、東26の平坦面では、巻揚

機と推定されるコンクリート構造物が確認されている。付近には、ボルトがむき出しの台座も2基残っているが、「要書録」には同所の記載は見られない。「要書録」は全冊が残っていないため、欠損した部分に記載されている可能性はあるが、詳細は不明である。

発掘調査では、第27図①6の鍛冶場と①7の選鉱場と推定される遺構を検出している。①6の鍛冶場は、調査第5地点に当たり、東西約5.7m、

第3表 藤田組経営下の施設一覧表（「要書録」より）

No.	施設名称	所在地	建物規模	建物構造	購入日	備考
1	事務所	佐摩村＝257番	桁5間×梁3間半		明治20年1月	新設
2	火薬庫	佐摩村ホ144番 馬場先山	桁1間半×梁1間半	瓦葺 石組構造	明治20年4月	新設
3	製錬所	佐摩村＝225番 岩屋堂	桁4間半×5間半		明治20年7月	譲渡
4	精錬所及び分析場	佐摩村＝210番			明治20年9月	増設
5	坑夫飯場	佐摩村ホ111番	桁10間×梁5間		明治20年9月	新設
6	土蔵	佐摩村＝257番	桁3間×梁2間		明治20年9月	
7	新横相坑口見張所	佐摩村272番			明治20年9月	
8	龍源寺坑口見張所	佐摩村＝183番	桁3間×梁2間半	瓦葺	明治20年9月	
9	火薬庫	佐摩村＝144番	桁1間半×梁1間半	瓦葺	明治20年9月	
10	事務所	佐摩村＝216番			明治20年10月	開所
11	焼骨炉	佐摩村ホ163番 天井道ノ左リ	桁2間×梁2間半	板葺	明治21年4月	新設
12	炭庫	佐摩村＝285番 出シ辻	桁10間×梁4間	板葺	明治21年4月	新設
13	倉庫	佐摩村＝227番 岩屋堂	桁6間×梁3間半	瓦葺	明治21年4月	新設
14	精錬所内見張所及び鉱石置場	佐摩村＝225番 岩屋堂			明治21年9月	増設
15	龍源寺坑口選鉱場	佐摩村＝183番	桁2間×梁5間	瓦葺	明治21年10月	増設
16	鍛冶場	佐摩村＝271番	桁3間×梁2間半	雑木葺	明治21年10月	新設
17	撰鉱場	佐摩村ホ366番－1番	桁7間×梁6間	雑木葺	明治21年10月	新設
18	坑夫飯場	佐摩村イ1128番ノ1	桁4間×梁1間半	瓦葺	明治21年10月	新設
19	土蔵	佐摩村＝257番	桁2間半×梁2間	瓦葺	明治21年10月	
20	精錬所及分析場	佐摩村＝210番			明治20年9月	増設
21	事務所	佐摩村二257番	桁1間×梁1間半		明治20年9月	増設
22	村上坑坑夫上り小屋及び鍛冶舎	大森村ホ384番	桁2間半×梁4間		明治20年9月	新設
23	銀山部開坑掛詰所	大森村ホ382番	桁4間×梁5間		明治20年9月	新設
24	村上坑見張所	大森村ホ382番	桁1間×梁2間半		明治20年9月	新設



第28図 昆布山谷地区第5地点鍛冶場跡



第29図 昆布山谷地区第2地点選鉱場跡

南北約5mの礎石を並べた土台建物跡である。建物内部では、鍛冶炉を2基と、金床石設置土坑と思われる遺構などを検出しており、鍛冶場跡と推定されている。遺物などから近代以降と思われ、付近では「藤田組大森鑛山所」と書かれた土瓶も見つかっている。「要書録」には、明治21(1888)年に桁3間×梁2間半で雑木葺の鍛冶場の建築届けが記載されており、建物規模、検出位置がほぼ一致しており、他に該当する遺構も確認できないことから、検出遺構がこの鍛冶場と推定されている。⑪の選鉱場は、調査第2地点で確認されている。地表下20~30cmで、東西約13.8m、南北約11.8mの逆L字型を呈する建物跡が検出されている。建物内部では、水溜と思われる方形石組遺構や、鉱石を粉碎したと推定される底部に要石を設置した土坑などが確認されている。「要書録」には、明治21(1888)年に同地において選鉱場を新設する記述が見られる。建物は、7間×6間の逆L字型と記載されており、検出遺構と規模、形状が一致することから選鉱場と推定されている。また、同所は、前述の通り長福寺の推定地であるが、「要書録」でも長福寺跡地との記載が確認できる。そのことを裏付けるように、敷地の西側には岩窟が所在し、石碑と思われる石造物が残る。

道路部分の調査では、江戸期の道路面上層に、洪水層と考えられる砂層が厚く堆積しており、その上にステップ状の石列を設置した明治期と推定される道路面を確認している。

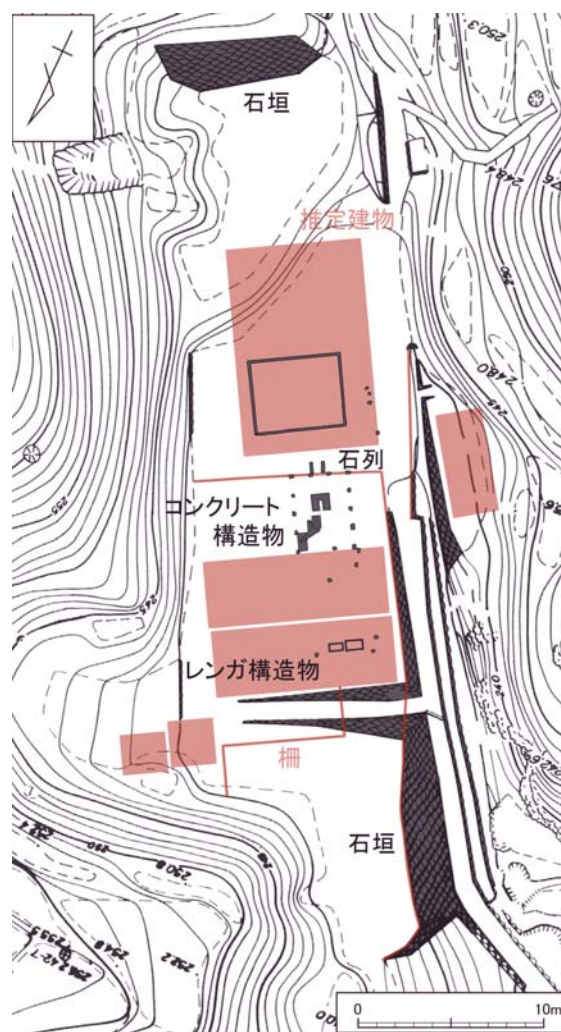
昆布山谷以外でも多くの遺構が確認されている。栃畑谷に所在する三木工場跡では、高さ8mの石垣と広大な平坦面が確認されている。この三木工場は明治21(1888)年から28(1895)年まで操業されたと推定されており、明治21年撮影とされる古写真も残っている。(第30図)現地には、4間×3間の建物礎石や、施設の基礎と思われるコンクリート構造物、レンガ構造物などが確認されており、プール状遺構も残る。これらの遺構と、古写真を元に推定した建物を、地形図に反映したものが第31図である。図を見れば明らかなように、現存する遺構と古

写真の建物は一致しない。三木工場は「要書録」には全く記載が見られず、詳細は不明であり、写真に写る建物の後に、別の施設が建設された可能性もある。

竹下弘著『私説石見銀山』⁽²³⁾によると、三木山にボイラーを据え蒸気を坑内に送って排水ポンプを動かしたが、発電所の建設により電力に



第30図 三木工場古写真(北から望む)



第31図 三木工場跡平面図(S = 1 : 400)

切り替えたとあり、竹下は子どもの頃、残されたボイラーにのぼって遊んでいたと述べている。そのボイラーは、牛に引かれてどこかに運ばれていったが、後年、台湾の瑞芳鉱山で再会したとも記している。竹下は明治29（1896）年生まれなので、運ばれたのが10歳前後とすれば、明治40（1907）年前後と推定される。藤田組は明治30（1897）年から瑞芳鉱山の経営に着手しており、大森鉱山所長の木村陽二が瑞芳鉱山の所長も兼務していることから、話の信憑性はあると思われる。

この他、栃畑谷の谷奥には、明治20（1887）年に火薬庫（第27図②）が建設されており、現在、建物基礎の石積みや、土手・石垣が良好に残っている。

ここまでみてきたように、藤田組による開発は、昆布山谷においては、江戸期から繋がる施設を踏襲しながらも、施設を建設するなど、新たな景観を生みだしている。ただ、敷地の大きな造成などは僅かであった。藤田組が取得した土地の一部は、そのまま藤田組を引き継いだDOWAホールディングスの名義となって残っている。その後も、手が入ることなく、施設を閉鎖し、解体した当時の姿を留めている。ただ、近年では草木や倒木、水害による土砂の流入によって、当時の構造物はおろか、平坦面ですら確認することが難しくなっているのが現状である。

（尾村）



第32図 出土谷集落跡（平成30年2018）

4. ま と め

3章では、昆布山谷地区と出土谷地区の各期別に谷合いの中世から近代の景観を述べてきた。本章では、両地区の景観の画期となった時期と、その特徴やその原因を述べてまとめたい。

鉱山町の集落について

日本の鉱山集落を分類した川崎 茂は、間歩や製錬場所及び住居の空間が点在する集落を「歴史的鉱山集落」と呼び、また明治以降、資本主義体制下で本格的に西洋技術を導入し、各施設を集中させた鉱山の集落形態を「近代的鉱山集落」とした⁽²⁴⁾。これを石見銀山集落に当てはめると、前者は昆布山谷を含む銀山六谷であり、後者は藤田組による大国村の柑子谷集落となる。両者は形成時期や集落構造でも違いが明瞭であり、また休山後の集落あり方でも大きな差が生じた。⁽²⁵⁾

次に、銀山町の成立とその後の景観の変化を見てみたい。江戸時代初めのⅡ期に、役所を山吹城山麓から大森に移し、仙ノ山から山吹城を含む山間に柵を巡らし、近世の銀山町が形成される。16世紀から間歩が点在する銀山六谷と呼ばれた各谷合いでは、口番所、吹屋などの製錬施設を持つ職住同一の建物、銀山に居住地、宗教施設である寺社などからなる集落ができていた。各谷の集落は戦国から江戸時代にわたって、盛衰はあったものの、江戸時代後半までは継続された。現在に残る遺跡として、銀などの生産工房跡や住居跡と推定される1000カ所以上の平坦面が確認されている。⁽²⁶⁾ 一方、銀山川筋



第33図 永久製錬所（大正3年1914）

の下河原や休谷では、軒数は少なくなったものの、現在も集落が存在している。寺院も中世から近世にかけて仙ノ山頂部の石銀地区から山麓に多く点在していた。

近代に入り、Ⅶ期には藤田組が明治20年から鉱山経営を始める。当初は、昆布山谷など江戸時代に盛んに活動していた場所で操業を開始したが、早い段階から大国村柑子谷の永久坑口周辺部へ主要な施設を移していくのである。

昆布山谷・出土谷の区割りについては調査報告がある。⁽²⁷⁾ これにより、銀山町の集落が徐々に衰退するが、特に銀山川上流域の昆布山谷等では著しい。谷合の中程を通る山道の両側に階段状に平坦面が設けられている。明治の切図からすると、昆布山谷の道は佐毘売山神社から仙ノ山の西麓を通り、三久須集落に繋がる。幅1間半で、片側に水路を伴い、両側の平坦面には建物が建つ。

「高橋家文書」⁽²⁸⁾ には「銀山往古は面口5間、裏あり限りを壱ヶ所と申し候、京見せは百間を三拾ヶ所と申し候、所々善悪により不同これあり」とあり、間口5間（約9.8m）と3間3尺（約6.8m）が多かったと考えられる。奥行きについては、狭い谷部に所在するため、場所により地形に左右されている。発掘調査の中で、山の斜面が崖状に加工され、建物が斜面まで迫って建てられていた調査区も多く、岩盤には柱穴状のピットや溝跡も確認されている。この岩盤加工は本谷の釜屋地区や大森の町並みでも確認されており、石見銀山遺跡の敷地確保に伴う遺構の特徴の一つである。

なお、下河原地区は銀山川沿いの中では、谷幅が広く、平坦面が確保できており、短冊状の地割が多い。一方、石銀地区や仙山山麓では方形地割りとなる。⁽²⁹⁾ 昆布山谷でも明治の切図を見ると、藤田組の用地以外は方形の区割りである。

昆布山谷・出土谷の土地利用と近世の景観

銀山発見から盛行期までの16世紀代の景観は既に記したとおりである。しかし、発掘調査ではその時期の遺構は確認ができていなく、本稿ではⅡ期以降を対象にしている。歴史的集落と

しての景観では、江戸時代のⅡ期からⅢ期、Ⅴ期の2時期に大きな変化があると考えており、以下に述べていきたい。

Ⅱ期は、石見銀山が幕府の直轄領となり、鉱山経営に精通した大久保長安が初代奉行に就任し、銀の増産に結びついた時である。この時期に大森の町が新たにでき、奉行所も移転し、陣屋町と銀山町と分けて支配することになった。

「元和国絵図」を見ると銀山町に柵が設けられたことが分かる。3章で述べたように、昆布山谷において平坦面を確保する岩盤加工がこの時期から大規模に行なわれ、基軸となった道の両側には建物が建ち並ぶ。地割りも、その後に踏襲されたように、定まっていたと考えられる。また、Ⅲ期には敷地を区画する石垣が道と屋敷で検出されている。昆布山谷5地点の石垣を見ると、大小で形も不規則の切石が雑然と積まれている。この時期に、石垣が銀山で広く採用されると考えられ、5地点の土坑（SK03、SK04）でも同じ形態の石垣が確認されている（第3図の3）。これ以降、昭和期まで石垣は銀山町の景観を形造る重要な要素となっている。

家並みと同様に、寺と墓地も銀山開発時からの銀山町には欠かせない景観である。石見銀山遺跡での寺跡は86ヶ所、地名等を含めると139ヶ所⁽³⁰⁾となり、まさに銀山100ヶ寺である。⁽³¹⁾ 境内の広さをみると、昆布山谷など山間にある寺は銀山川沿いに比べ境内の面積は狭い。また、寺跡の背後や尾根上には石塔や墓石をもつ墓地が数多く所在している。

昆布山谷の寺跡は、谷部に虎岸寺跡と長福寺跡が、尾根上に長楽寺跡、妙本寺上墓地の平坦面が所在する。出土谷の山腹には西福寺跡や寺跡と推定される平坦面もあり⁽³²⁾、さらに字名で字甚光院が残り、その付近には宝篋印塔や五輪塔等の石塔が多く存在している。石造物については2章で述べたように、紀年銘からすると江戸時代初めと、江戸時代後期との2時期に造立のピークが認められ、江戸時代の前半期に少なくなる傾向にある。石造物の増減は、人口の推移、すなわち鉱山集落の盛衰をよく物語っている。

前述したように、最盛期を過ぎた17世紀後半には昆布山谷の奥部の集落は衰退し、正徳6年(1716)の絵図が示すように長楽寺跡の麓までが町並みとなっていたと推定される。また、第

24図の絵図によると三久須との境に置かれていた萩峠口番所も江戸時代後半には新横相坑口付近へ移されている。

第4表 昆布山谷地区・出土谷地区のあゆみ

時期	西暦(年)	和暦	出来事
Ⅰ期	1527	大永7	石見銀山が発見される(銀山再発見)
	1534	天文3	出土谷の手島惣右衛門が高野山に石塔を建てる
	1539	天文8	昆布山谷で銀製錬の記事が残る
	1542	天文11	昆布山谷で、大水が出て、1300人が死亡する
	1585	天正13	妙本寺上墓地の最古年号
	1594	文禄3	長楽寺跡と甚光院跡の石塔の最古年号
	1601	慶長6	大久保長安が初代奉行となる(銀山開発最盛期)
Ⅱ期	1602	慶長7	大久保長安が大森町普請を指示する
	1603	慶長8	銀山町大火 3000軒が消失する 山神社も類焼 ⁽²⁾
	1615～1623	元和元～元和9	「元和国絵図」が作成される
	1641	寛永18	銀山境界の木柵が垣松に変わる
	1645	正保2	「正保国絵図」が作成される
Ⅲ期	1675	延宝3	奉行制から代官制に移行
	1693	元禄6	泉山の開発が始まる
Ⅳ期	1715	正徳5	新切間歩の開発が始まる
	1716	正徳6	「長楽寺・仙光院の境界絵図」が作成される
	1731	享保16	井戸平左衛門、大森代官に就任する
	1766	明和3	羅漢寺に五百羅漢が完成する
Ⅴ期	1789	寛政元	「石見銀山麓絵図」が作成される
	1800	寛政12	大森大火 大森町の2/3が焼失する
	1818～1829	文政元～文政12	「銀山町絵図」が作成される
	1866	慶応2	幕長戦争が勃発する 長州軍が大森陣屋を占拠する
	1867	慶応3	大政奉還
Ⅵ期	1869	明治2	大森県が設置される
	1871	明治4	上地(知)令が発令される
	1872	明治5	浜田地震が発生する
	1873	明治6	日本坑法が発令される
	1873	明治6	安達惣右衛門により鉱山経営が開始される
	1877	明治10	長楽寺が神宮寺に合併される
	1877	明治10	ライマンが石見銀山を訪れる 翌年「山陰地質紀行」を発行
	1886	明治19	藤田組により「藤田組大森鉱山」が設立される
	1892	明治25	柑子谷に製錬所が完成する
	1895	明治28	清水谷に製錬所が完成する
Ⅶ期	1923	大正12	大森鉱山が休山する

(太字は昆布山谷・出土谷に関連する出来事)

藤田組の鉱山経営による近代の景観

明治に入り、鉱山経営は前述のライマンの報告にある様に、零細な経営となっていた。昆布山谷地区の景観は、口番所や寺が無くなり、家並みも少なくなっていたと考えられる。

しかし、明治19（1886）年になると景観が一変する。大阪の藤田組が昆布山谷と栃畑谷などで用地を取得し、事務所や製錬所などの施設を建設していくのである。屋根には板葺き等の今までと同じものもあるが、赤色の瓦葺きの建物も存在した。中には譲渡されて、これまでの施設をそのまま使用することもあった。また、栃畑谷の三木工場跡や休谷の火薬庫等ではレンガなども使用している。ただ、土地区画は江戸時代のままで、鉱口前の隣接する区画（敷地）を連結させて、より低い区画を廃滓捨て場として使用している。藤田組の土地利用は、先に記した歴史的集落の景観を結果的には保持することになった。よって、新たに大きな土地造成は昆布山谷では行なわれていないのである。

寺院については、明治維新後の土地令などが影響し、明治中頃には昆布山谷や出土谷では、寺院が殆どなくなっていた⁽³³⁾。また、宅地も少なくなっており、谷の入口部の佐比売神社付近に限られていた。昆布山谷は、土地利用としては藤田組の鉱山開発の場となり、景観としては佐比売山神社や一部の民家を除いて、藤田組に関連する建物が大部分を占め、規模も大きく、際だっていたと考えられる。

一方、柑子谷の永久坑口にあった施設には、明治後半には選鉱場・製錬所・事務所・飯場等の各建物が集中し、近代的鉱山集落として偉容を誇る景観に変わっていった。（第33図）しかし、この鉱山施設も大正12（1923）年の休山以後は数年を待たずに施設は解体⁽³⁴⁾されて、近代化遺産⁽³⁵⁾となっていたのである。

（西尾）

以上のように、昆布山谷を中心とした銀山町の景観変遷を見てきた。多くの課題が残されていることは言うまでもないが、今後は昆布山谷を除く銀山六谷や、考古学的には検討できなかった陣屋町である大森町との土地利用や景観

変遷の比較、両町の居住者の相違や機能分担なども含めて、石見銀山全体での集落の特徴と変遷を探る必要があるだろう。そのためには、文献史や建造物などの他分野と融合した共同研究がさらに進展することを期待したい。また、日本各地で進められている鉱山集落研究の成果を把握し、石見銀山遺跡との比較研究を進めていくことも重要な課題といえる。（今岡）

〈注〉

- (1) 石見銀山発見の年については大永6年が通説であったが、最近の研究成果により大永7年の説が有力になっている。
『石見銀山資料解題 銀山旧記』島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室 2003
- (2) 『石見銀山遺跡総合調査報告書第4冊』田中圭一「わが国銀山開発に於ける石見人の役割」島根県教育委員会 1999
- (3) 「大久保長安書状」『吉岡家文書』
- (4) 「銀山旧記（本城家文書）」に記載されているが、同時代資料ではないため検討が必要。発掘調査では現在までのところ痕跡は確認されていない。
- (5) 「元和年間石見国絵図」浜田市教育委員会蔵
- (6) 「正保石見国絵図」津和野町教育委員会蔵
- (7) 「石見銀山ことはじめ」大田市教育委員会など
- (8) 長楽寺は真言宗の寺院であり、本来他宗派の檀家は受け入れないと思われるが、長楽寺の石造物悉皆調査では「釈〇〇」と言った他宗派と考えられる墓石も確認されている。銀山のように人口が非常に流動的な地域では、通常の檀家制度では対応しきれない事態が発生していた可能性を指摘しておきたい。
- (9) 『安田家文書』（川上幸太郎蔵）に含まれるが、文書に明確な表題が無く、仮に「長楽寺・仙光院の境界絵図」とした。水害により石垣などが流失し、土地の境界について千光院と紛争となり、その土地境を証明するために作成された絵図である。
- (10) 「茂右衛門家」について、「正徳の覚書 間歩改め」（野沢家文書）によれば、昆布山谷の項に村上山や半右衛門山の山主として長見茂右衛門の名前が見える。また、栃畑谷にも上正蓮寺山と備後横相の山主としても名前が見え、その内、上正蓮寺山は榎山である。このことから、長見茂右衛門は正徳年間に昆布山谷から栃畑谷一帯で活躍した山師と考えられ、絵図に見える茂右衛門との関連が想起されるが、関連を示す史料は見つかっていない。
- (11) 報告書では、G地点について平坦面を北側、東側、南側とに分け、東側を禅宗の墓地と比定し、禅宗寺院である長福寺の墓地と推定している。実際、長福寺の平坦面とG地点は道で連絡している。
- (12) 藤原雄高「貸借証文にみる19世紀の鉱山町の様相」『石見銀山テーマ別調査研究報告所2』島根県教育委員会・大田市教育委員会など
- (13) 「石見銀山麓絵図」『高橋家文書』

- (14) 「銀山町絵図」『野沢家文書』
- (15) 民営鉱山に関する統一的な鉱業法典で、政府と鉱業者との関係を細かく規定している。民間鉱業者は、鉱区の借用によって請負稼行することを内容とした
- (16) 大久保雅弘翻訳の「ライマンの山陰地質紀行」による。
- (17) 「寺に発布された上地に関する絵図」(仮) 個人蔵
- (18) 明治12年に、当時戸長の川北徹蔵が長福寺の概要を島根県令宛に提出した書
- (19) 当時、大森町役場が作成した郡界・村界・地番境・道・川などが記載された切図
- (20) 明治9年に佐摩村銀山町を中心に、高橋富次郎が道路・河川を調査した書
- (21) 商工省が、重要鉱物に関する増産命令権を法律にまとめたもの。日華事変下による緊急需要に対処するため、施行期間は5カ年に限定したものであった
- (22) 明治期に、藤田組が石見銀山を開発するにあたり、官公署宛に提出した文書の控え
- (23) 竹下弘 『私説 石見銀山』中村ブレイス株式会社2005より
- (24) 川崎 茂「歴史的鉱山町の形態と機能」『地理学評論』第34巻7号1961
川崎 茂『日本の鉱山集落』大明堂1973
- (25) 川崎 茂は歴史的鉱山町である大森町の銀山集落から近代的鉱山集落である大國村柑子谷の集落へ移っていく状況を「大森型」と呼んでいる。一方、歴史的鉱山町と近代的鉱山集落が部分的に重なる配置になっている形態を「生野型」としている。
- (26) 大國晴雄「石見銀山「柵内」の復元」『石見銀山一石見銀山関係論集一』島根県教育委員会2002
- (27) 尾村 勝「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷一文献史料と分布調査成果からみる一」『世界遺産石見銀山の調査研究4』島根県教育委員会・大田市教育委員会 2014
- (28) 「高橋家文書」「御山作法銀山法度書」より。石見銀山資料館藤原雄高氏の教示による。
- (29) 注24に同じ。
島根県教育委員会・大田市教育委員会他『石見銀山遺跡総合調査報告書』I 1999
- (30) 注24に同じ。
- (31) 『石見銀山百箇寺』三瓶古文書を読もう会1995
- (32) 「銀山覚書」によると、出土谷には徳岸庵という寺があったことがわかる。
- (33) 川崎 茂『日本の鉱山集落』大明堂1973
- (34) 注31に同じ
- (35) 仁摩町教育委員会『町内遺跡(石見銀山遺跡) 詳細分布調査報告書』I・II 2002・2003

〈参考文献〉

- 島根県教育委員会『石見銀山史料解題 銀山旧記』2003
- 田中圭一「わが国銀山開発に於ける石見人の役割～「高野山浄心院過去帳」を中心に～」『石見銀山遺跡総合調査報告書』第4冊 島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか1999
- 三瓶古文書を読もう会『石見銀山百か寺』1995
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山近代史料

- 集 第一集～第三集』2016～2018
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書4 長楽寺跡・石見銀山附地役人(河島家・宗岡家)』2004
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書14 大谷地区 字甚光院の石造物調査』2014
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書15 析畑谷地区 字甚光院の石造物調査』2015
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書16 昆布山谷地区 妙本寺上墓地E地点・G地点 虎岸寺跡の石造物調査』2016
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書17 昆布山谷地区 妙本寺上墓地A地点の石造物調査』2017
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書18 昆布山谷地区 妙本寺上墓地B・C・D・F・H地点の石造物調査』2019
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会他『石見銀山遺跡総合調査報告書』I 1999
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告書』II 2005
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告書』III 2013
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』1～8 1992～1997
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』9～14 1998～2004
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』15～26 2005～2018
- 大田市教育委員会『史跡石見銀山総合整備事業報告書別冊1 史跡石見銀山総合整備事業に伴う発掘調査報告書』2013
- 大田市教育委員会『町並みと銀山 遺構確認調査概報1』2003
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『世界遺産 石見銀山遺跡の研究1～8』2010～2018
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1・2・3』2011・2017・2017
- 島根県教育委員会『石見銀山論集』2002
- 島根県教育委員会『石見銀山関係編年史料綱目』2002
- 島根県古代文化センター『島根県古代文化センター研究論集第17集 近世・近代の石見焼の研究』2017
- 大田市教育委員会『石見銀山ことはじめseries I』2018
- 中野 義文『銀山社会の解明ー近世石見銀山の経営と社会ー』清文堂出版 2009
- 大田昌利氏 「大森鉱山史」
- 佐々木善夫 「大森鉱山開発の歴史 沿革・変遷」
- 竹下 弘『私説 石見銀山』なかむら文庫2005